

秋田県文化財調査報告書第234集

東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書XIV

— 虫内Ⅱ遺跡 —

1993・3

秋田県教育委員会

秋田県文化財調査報告書  
第234集

# 東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書XIV

— むし ない 虫内 II 遺跡 —

1993・3

秋田県教育委員会

## 序

東北横断自動車道秋田線は、秋田県の高速交通体系の根幹となるものです。すでに秋田市から横手市までの57.4kmは、平成3年7月に開通し供用されており、現在は横手市から岩手県湯田町までの区間15.8kmについての工事が、進められています。

しかし、本区間の路線上には、多くの遺跡の存在することが確認されており、秋田県教育委員会では、平成2年から工事に先立って、遺跡の発掘調査を実施して、記録保存に努めております。

本報告書は、平成3年度に調査しました山内村虫内Ⅱ遺跡の調査成果をまとめたものであります。

本書が、埋蔵文化財の保護に広く活用され、郷土の歴史や文化を研究する資料として、多くの方々に御利用いただければ幸に存じます。

最後に、本調査の実施及び本書の刊行に際し、御協力を賜りました日本道路公団仙台建設局、山内村、山内村教育委員会をはじめ、関係各位に対し厚く御礼申し上げます。

平成5年3月25日

秋田県教育委員会

教育長 橋木顯信

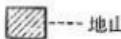
## 例 言

1. 本書は、東北横断自動車道秋田線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書の14冊目の報告書である。
2. 本書は、平成3年度に調査された山内村に所在する虫内II遺跡の調査結果を収めたものである。
3. 調査の内容については、すでにその一部が調査略報などによって公表されているが、本報告書の内容がそれらに優先する。
4. 本書の執筆は、栗澤光男が行った。
5. 本書に使用した地図は、国土地理院発行の5万分の1『横手』地形図である。
6. 遺構上層図中の土色については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財團法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色帖』によった。
7. 掘図中の遺物番号は、遺構内外の出上を問わず、土器・石器ごとに通し番号を付しており、その番号は、図版中の遺物番号と対応している。
8. 遺構番号は、その種類ごとに略記号を付し、検出順に通し番号を付したが、後に検討の結果、遺構ではないと判断したものは欠番とした。また遺構・遺物には下記の略記号を使用した。

S K…土坑 S R…上器埋設遺構 S D…溝状遺構

なお、遺構図面中に記したSは碟を示している。

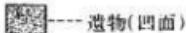
9. 掘図に使用したスクリーントーンは、以下の通りである。



--- 地山



--- 遺物(磨り面)



--- 遺物(凹面)

## 目 次

### 序

### 例文

第1章 はじめに.....	1
第1節 調査に至るまで.....	1
第2節 調査の組織と構成.....	3
第2章 遺跡の立地と周辺遺跡.....	6
第1節 遺跡の立地.....	6
第2節 周辺遺跡.....	6
第3章 発掘調査の概要.....	8
第1節 遺跡の概観.....	8
第2節 調査の方法.....	8
第3節 調査の経過.....	10
第4章 調査の記録.....	13
第1節 検出遺構と遺構内出土遺物.....	13
1. 上坑.....	13
2. 上器埋没遺構.....	17
3. 溝状遺構.....	20
第2節 遺構外出土遺物.....	21
1. 上器.....	21
2. 土製品.....	29
3. 石器.....	29
第5章 まとめ.....	42

## 挿 図 目 次

第1図 横手I・C以東の路線と遺跡.....	4
第2図 工事計画と調査範囲.....	5
第3図 周辺遺跡位置図.....	7
第4図 調査範囲図.....	9
第5図 調査区の基本十層模式図.....	10
第6図 遺構配図.....	11・12
第7図 SK01・03・04・05・06.....	15
第8図 遺構内出土土器・石器.....	16
第9図 SK09・10・11・SR02・12.....	18
第10図 SR02・12出土土器.....	19
第11図 SD08.....	20
第12図 遺構外出土上器(1).....	23
第13図 遺構外出土土器(2).....	24
第14図 遺構外出土土器(3).....	25

第15図	遺構外出土土器(4).....	26
第16図	遺構外出土土器(5).....	27
第17図	遺構外出土土器(6).....	28
第18図	遺構外出土石器(1).....	30
第19図	遺構外出土石器(2).....	31
第20図	遺構外出土石器(3).....	32
第21図	遺構外出土石器(4).....	33
第22図	遺構外出土石器(5).....	34
第23図	遺構外出土石器(6).....	35
第24図	遺構外出土石器(7).....	36
第25図	遺構外出土石器(8).....	37
第26図	遺構外出土石器(9).....	38
第27図	遺構外出土石器(10).....	39

### 表 目 次

第1表	石器計測一覧.....	40
第2表	石器計測一覧.....	41

### 図 版 目 次

図版1	1. 調査前全景(北▷南).....	43
	2. 調査後全景(西▷東).....	43
図版2	1. S K01土坑(南▷北).....	44
	2. S K03土坑(南東▷北西).....	44
	3. S K04土坑上面縫接状況(西▷東).....	44
図版3	1. S K04土坑(南▷北).....	45
	2. S K05土坑(西▷東).....	45
	3. S K06土坑(南西▷北東).....	45
図版4	1. S K09土坑(西▷東).....	46
	2. S K10土坑(北▷南).....	46
	3. S K11土坑(南▷北).....	46
図版5	1. S R02土器埋設遺構(東▷西).....	47
	2. S R12土器埋設遺構(南東▷北西).....	47
	3. S D08溝状遺構(南▷北).....	47
図版6	遺構内出土遺物.....	48
図版7	遺構外出土遺物(1).....	49
図版8	遺構外山上遺物(2).....	50
図版9	遺構外出土遺物(3).....	51
図版10	遺構外出土遺物(4).....	52
図版11	遺構外出土遺物(5).....	53
図版12	遺構外出土遺物(6).....	54

## 第1章 はじめに

### 第1節 調査に至るまで

東北横断自動車道秋田線は、首都圏への時間短縮と県内の陸上交通体系の改善など、地域の生産活動と住民生活に必要な情報や資源の交流を促進することを目的に計画された高速道路である。道路は、東北自動車道から岩手県北上市で分岐し、横手市一大曲市を経て秋田市に至る総延長108kmに達する。このうち、秋田－横手間57.4kmについては、昭和53年11月の第8次施行命令によって具体化し、既に平成3年7月に供用が開始されている。

秋田－横手間の道路計画路線内に存在する埋蔵文化財包蔵地の扱いについては、昭和60年4月に日本道路公団と秋田県教育委員会との間で協議した結果、計画路線の変更が無理であることなどから、記録保存の措置を取ることで合意し、昭和60年の河辺郡河辺町七曲地区に所在する6遺跡を皮切りに平成元年度の仙北郡南外村の大畠潜沢Ⅱ遺跡まで、合計27遺跡の発掘調査<sup>(註1)</sup>が実施され、それぞれに報告書が刊行されている。

横手インターチェンジ(I・C)以東の横手－湯川間19.7kmについては昭和61年3月に第9次施工命令が下された。これに伴い昭和62年3月には、日本道路公団仙台建設局長から秋田県教育委員会教育長あてに、道路計画路線内に所在する埋蔵文化財包蔵地の分布調査の依頼があった。これを受けて秋田県教育委員会では、昭和62年5月と同63年6月に遺跡分布調査を実施し、平鹿郡山内村の計画路線内に11遺跡が存在することを報告した。また、横手I・C以東の横手市分についての分布調査は、横手－秋田間の分布調査と同時に、昭和56年と同58年に実施され、4遺跡<sup>(註2)</sup>の存在することが報告されていた。これら計画路線上に存在する合計15遺跡の取り扱いについては、昭和60年の日本道路公団と秋田県教育委員会の合意を踏襲することとした。15遺跡は横手I・Cから北上市側に、柳田Ⅰ・柳田Ⅱ・小松原・新町遺跡(以上、横手市)、茂竹沢・小田Ⅲ・小田Ⅱ・小田Ⅰ・虫内Ⅱ・虫内Ⅰ・岩瀬・中島・相野々・上谷地・越上遺跡(以上、山内村)である。

発掘調査に先立って、横手市分として昭和62年には柳田Ⅰ・柳田Ⅱ遺跡、平成元年には小松原遺跡西半部、平成2年には小松原遺跡東半部と新町遺跡南半部、平成3年には新町遺跡北半部の範囲確認調査を実施した。その結果、柳田Ⅰ・柳田Ⅱ・小松原遺跡については遺跡の範囲が計画路線に及んでおらず、また新町遺跡北半部については宅地造成などによる擾乱が著しく遺構等が遺存していないため、これらは発掘調査の必要がないと判断された。<sup>(註3)</sup>

山内村分の遺跡範囲確認調査は、平成2年に虫内Ⅰ遺跡、平成3年に茂竹沢・虫内Ⅱ・岩瀬・

(註6) 中島・力石Ⅱ・越上遺跡、平成4年に小田V・小田IV・虫内Ⅲ・相野々・上谷地遺跡について実施した。その結果、中島・相野々・力石Ⅱ遺跡については遺跡の範囲が計画路線内には及ばないことから調査が不要となった。なお平成2年に、虫内Ⅰ遺跡の南東側と虫内Ⅱ遺跡の西側、及び上谷地遺跡の東側で縄文時代の遺物が採集され、この3つの地点にも遺跡の存在することが判明したことから、各々を虫内Ⅲ遺跡・小田IV遺跡・力石Ⅱ遺跡として登録し、範囲確認調査を行っている。これらのことから、横断道山内村分の発掘調査対象遺跡は、岩手県側から順に越上・上谷地・岩瀬・虫内Ⅲ・虫内Ⅰ・虫内Ⅱ・小田IV・小田V・茂竹沢遺跡の9遺跡となつたのである。

横手市の1遺跡・山内村の9遺跡に対する発掘調査は、平成2年度の新町遺跡から開始され、平成3年には越上遺跡・岩瀬・虫内Ⅰ遺跡の一部、虫内Ⅱ遺跡・茂竹沢遺跡が、平成4年には上谷地・虫内Ⅲ遺跡・虫内Ⅰ遺跡の一部、小田IV遺跡が実施されている。

註1：秋田県教育委員会『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅰ～Ⅲ』秋田県文化財調査報告書第150・166・180・186・189・190・191・205・206・207・209集 1986～1991(昭和61～平成3年)

註2：秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第179集  
1989(平成元年)

註3：秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第93集  
1982(昭和57年)

註4：秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第201集  
1990(平成2年)

註5：秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第217集  
1991(平成3年)

註6：秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第226集  
1992(平成4年)

註7：前述の小田I・小田II・小田III遺跡については、横断道の分布調査の際に付した遺跡名が、既に別の遺跡として遺跡地図に登録されていたことが判明したこと、地形的には1遺跡とするのが妥当であること等から、これらをまとめて小田V遺跡とした。

## 第2節 調査の組織と構成

遺跡名 虫内Ⅱ遺跡

遺跡所在地 秋田県平鹿郡山内村土糾字虫内17-1他

調査期間 平成3年5月20日～7月26日

調査面積 2,800m<sup>2</sup>

調査主体者 秋田県教育委員会

専門指導員 岡村 道雄 (文化庁記念物課文化財調査官)

板垣 直俊 (由利郡鳥海町立川内中学校教諭)

小林 達雄 (国学院大学文学部教授)

林 謙作 (北海道大学文学部助教授)

(五十音順)

調査担当者 栗澤 光男 (秋田県埋蔵文化財センター文化財主任)

武藤 祐浩 (秋田県埋蔵文化財センター学芸主任)

総務担当者 佐田 茂 (秋田県埋蔵文化財センター主任)

(現 秋田県立農業科学館主任)

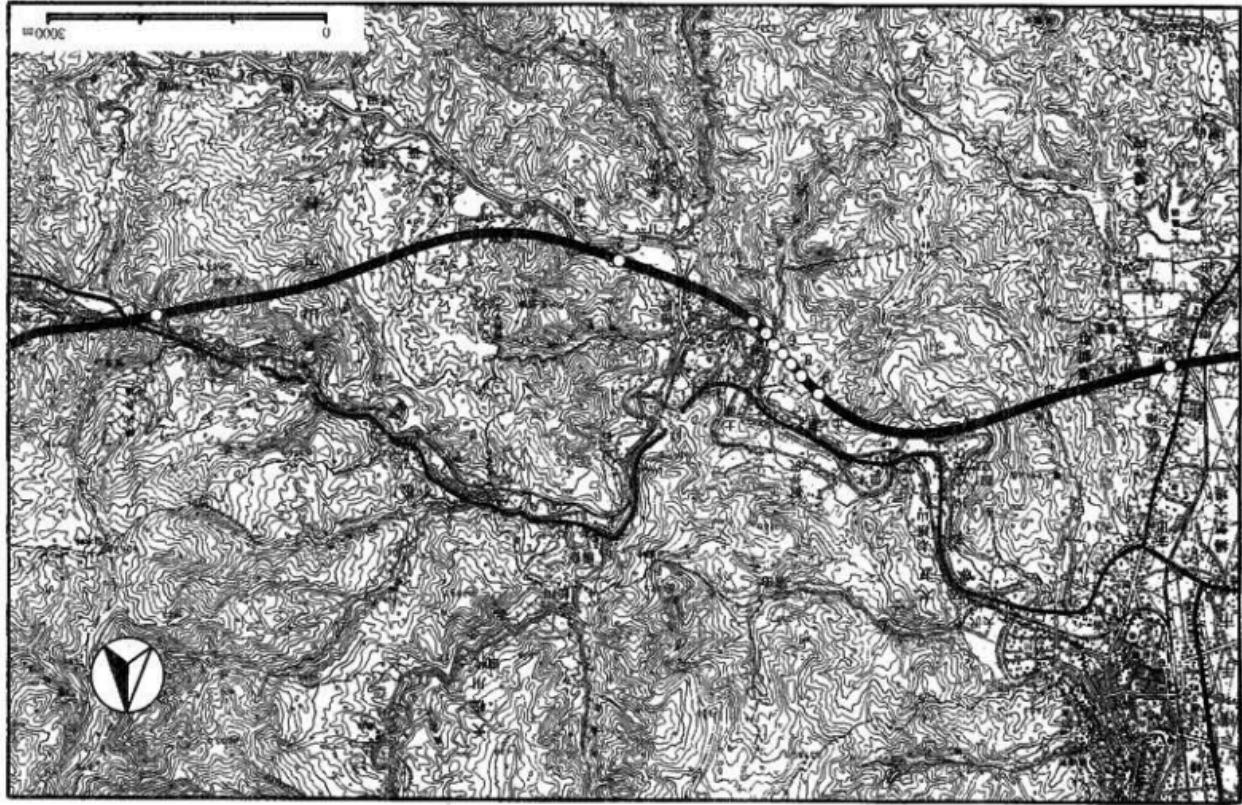
皆川 清 (秋田県埋蔵文化財センター主任)

佐々木 真 (秋田県埋蔵文化財センター主任)

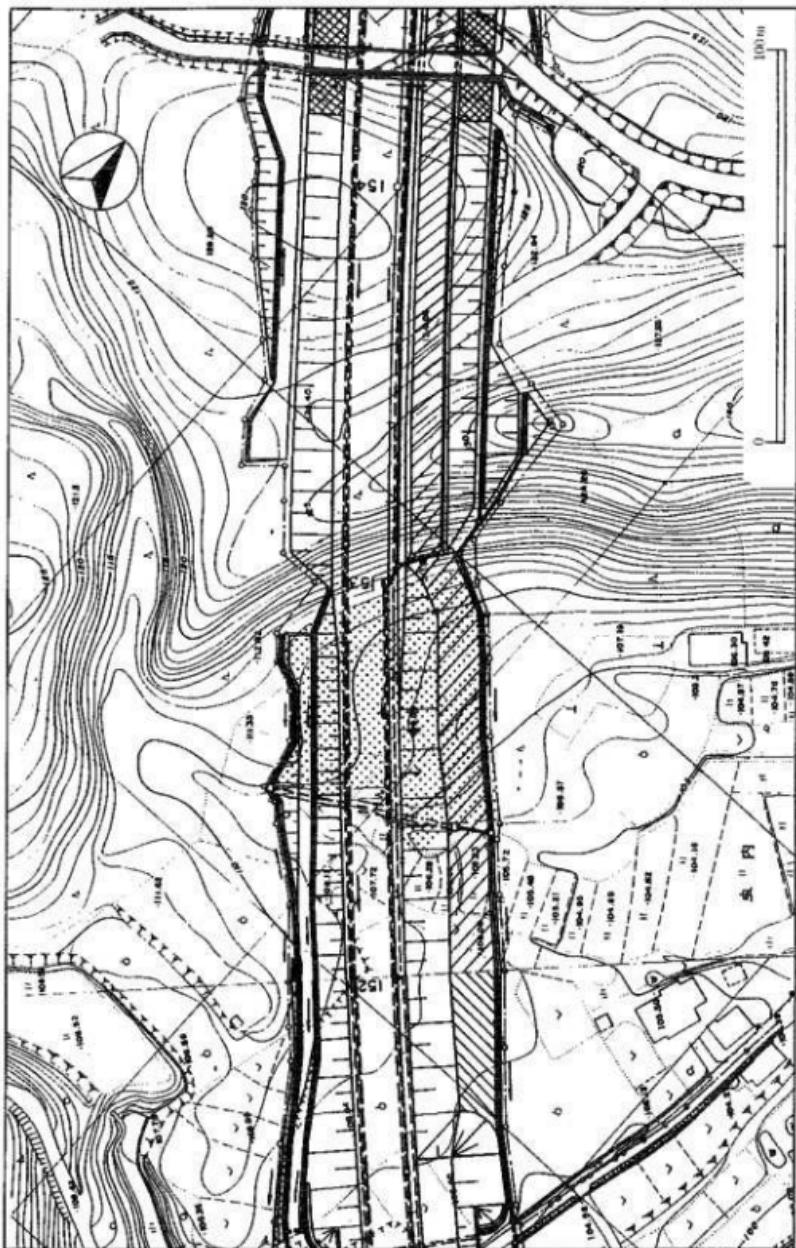
調査協力機関 山内村・山内村教育委員会、横手市・横手市教育委員会

平鹿町・平鹿町教育委員会

図1-1 横手1・C以東の路線と道路  
1 横手 2 上谷原 3 谷原 4 佐原 5 里原 6 里原II  
7 小田IV 8 小田V 9 道行沢 10 道行I



第2図 工事計画と調査範囲



## 第2章 遺跡の立地と周辺遺跡

### 第1節 遺跡の立地

奥羽脊梁山脈中の甲山を源とする横手川(旭川)は、蛇行を繰り返しながら、途中で武道川、黒沢川などを合流し、横手市へ向かって西流する。遺跡は、山内村南郷方面から西流してきた横手川が、虫内集落の南はずれで路をほぼ直角に北に変える屈曲部西側の低位段丘上に立地している。すなわち、遺跡は、JR北上線相野々駅の西約700mに位置し、国道107号と県道40号との交差点から村道虫内線を約600mほど南に進んだ西側の奥まった丘陵斜面下に所在する。標高は107~111mで、横手川の現河水面との比高は16mほどである。

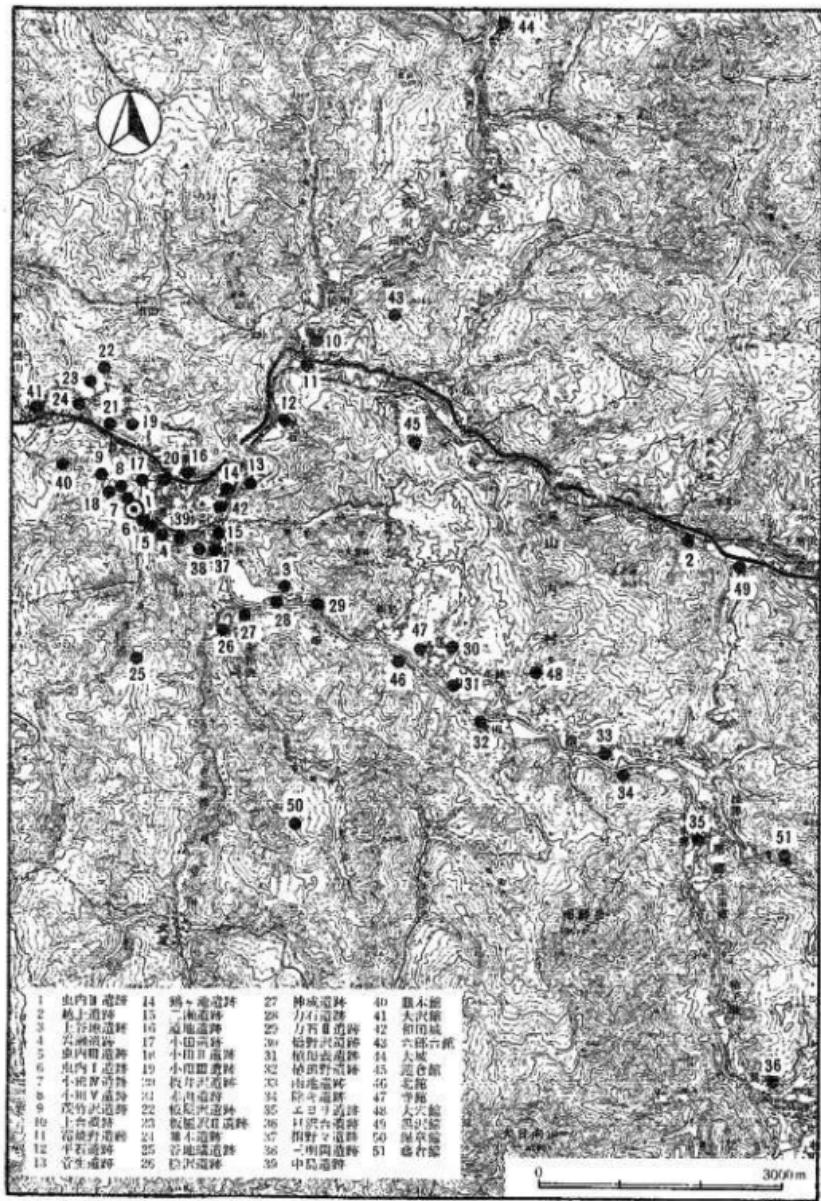
### 第2節 周辺遺跡

虫内Ⅱ遺跡が所在する山内村には、縄文時代や中世などの遺跡が、横手川とともに合流する諸河川などによって形成された河岸段丘上や、山麓の丘陵(台地)上に分布している。特に相野々駅および土淵地区周辺の河岸段丘上には、縄文時代の遺跡が集中して見られ、今回調査された虫内Ⅱ遺跡(1)もその中に含まれる。

縄文時代の遺跡(第3図1~39)は、前期から晩期まで各期を通じて発見されているが、これらには時期不詳の遺跡もある。今のところは晩期の遺跡が最も多く、順次中期と後期の遺跡、早期と前期の遺跡となる。このうち主要な遺跡としては、東北横断自動車道建設に伴い発掘調査され、後期後半~晩期前半の大規模な墓域が検出された虫内Ⅰ遺跡(6)、虫内Ⅲ遺跡(5)などがある。それらの墓域は、土壙墓と土器埋設遺構などの埋葬施設から構成されており、その埋葬施設の数は、調査面積の大きい虫内Ⅰ遺跡が300基前後、調査面積の小さい虫内Ⅲ遺跡が100基近く検出されている。こうした埋葬施設と同時期と思われる堅穴住居跡は、虫内Ⅰ遺跡で3軒確認されているだけである。この他周辺の集落遺跡には、前期の岩瀬遺跡(4)、中期末の虫内Ⅲ遺跡、道地遺跡(16)、中期末~後期初頭にかけての上谷地遺跡(3)、小田Ⅳ遺跡(7)、神成遺跡(27)、後期の茂竹沢遺跡(9)などがある。

中世の遺跡(第3図40~51)としては、13の城館遺跡がある。これらのうち、眞木館(40)、越倉館(45)、大穴館(48)、黒沢館(49)、藤倉館(51)、大松川館(山内村北端部に位置する)は、戦国時代に、現在の平鹿・雄勝郡を支配した小野寺氏との関連が考えられる城館遺跡である。

註1：秋田県教育委員会『秋田県の中世城館跡』秋田県文化財調査報告書第86集 1981(昭和56年)



第3図 周辺遺跡位置図

## 第3章 発掘調査の概要

### 第1節 遺跡の概観

虫内Ⅱ遺跡は、横手川左岸の河岸段丘上に立地している。遺跡の標高は西部が111m、中央部が109m、東部が107mほどであり、地形は東向きの緩い斜面となっている。

遺跡の西側は小田Ⅳ遺跡に至る急な斜面、北東側は湿地で、南側は東西に入り込んだ小さな沢によって区切られており、遺跡の推定される範囲は南西-北東約90m、南東-北西約70mと考えられる。この遺跡範囲のうち、今回の調査対象区域は遺跡のほぼ中央部に当たる。

また、調査区の南東側は一段低くなり、この低い段丘上には、虫内Ⅰ遺跡が立地している。同遺跡とは、調査区南東端に沿う沢で境をなしている。

遺跡の現況は、植林された杉林であり、調査区域の杉は伐採されていた。

なお、調査区内には、遺跡の北西約160mの水田(標高130m前後)に水を供給するための導水管が、南東部から北西部にかけて埋設されており、ちょうど通過付近に当たったSK10は、全体の半分ほどを削平されていた。

調査区の基本土層は、以下の通りに分けられ、第Ⅱ層を欠如する部分がある(第5図参照)。

第Ⅰ層：黒褐色土(10YR2/2) 層厚11~30cmの表土で、植物根を多量と土器片、フレークなどを少量含む。また、部分的に人為的な攪乱を受け盛土された箇所がある。

第Ⅱ層：黒褐色土(10YR2/2)~暗褐色土(10YR3/2) 層厚18~40cmで、土器片、石器、フレークなどを多く含む。調査区北西側では、層厚40~70cmの黒色土層(10YR2/1)である。

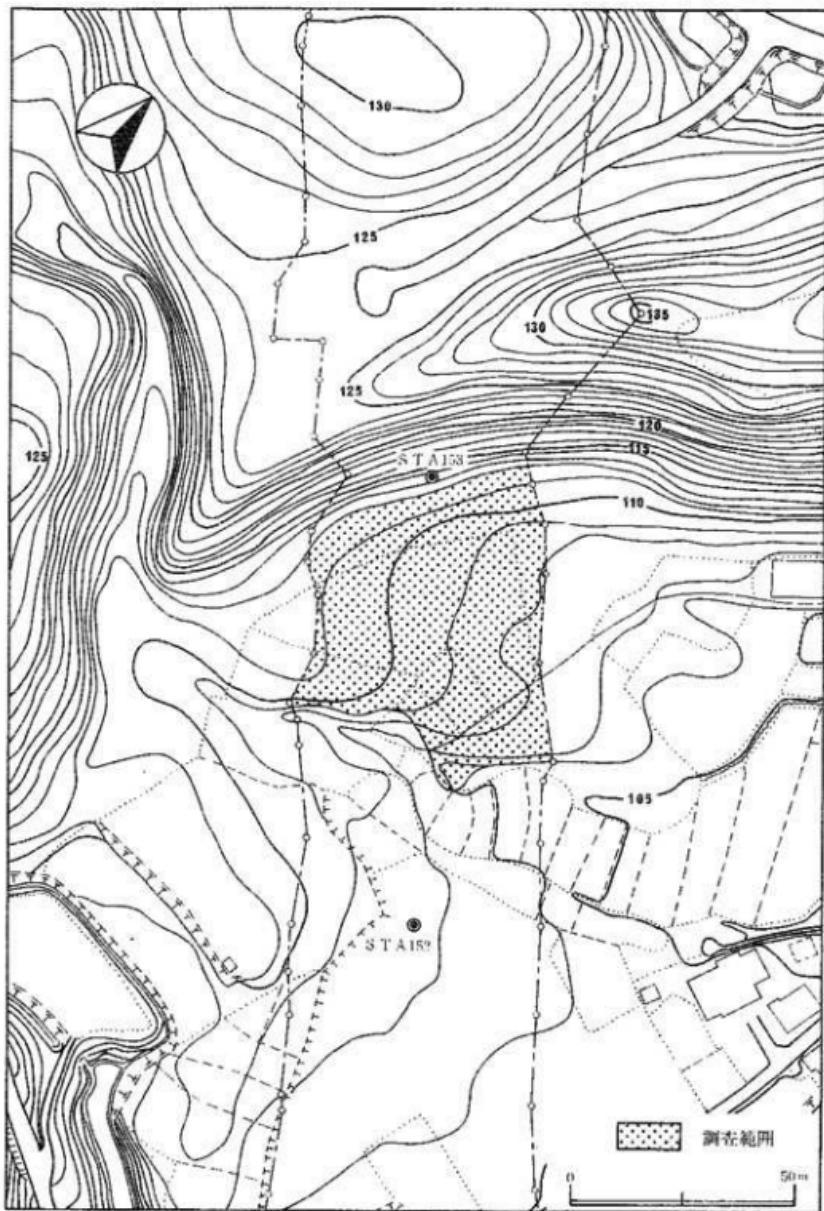
第Ⅲ層：暗褐色土(10YR3/3)~褐色土(10YR4/3) 層厚10~23cmで、小礫少量と土器片、石器、フレークなどの遺物を少量含む。

第Ⅳ層：にぶい褐色土(10YR4/3) 層厚6~10cmの第V層漸移層である。層上部には、土器片、フレークなどを少量と、暗褐色土粒子(10YR2/3)を多く含んでいる。

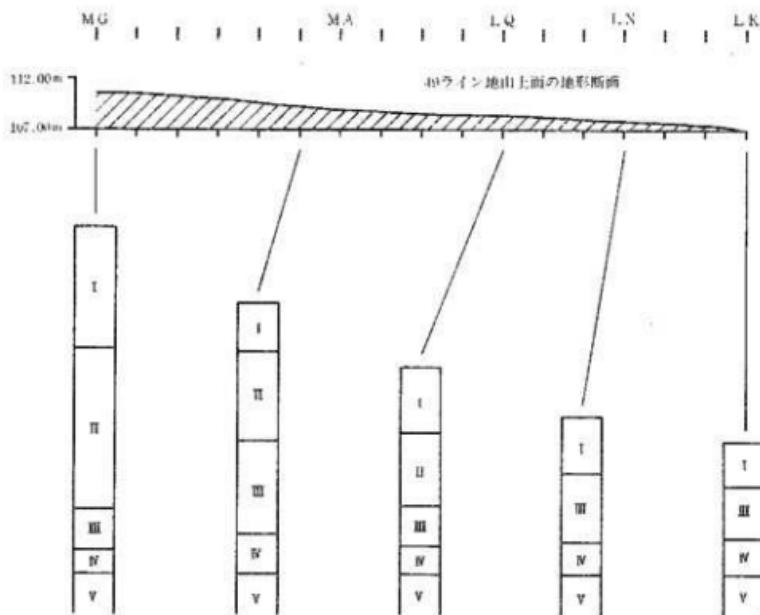
第V層：黄褐色土(10YR5/8) よくしまった粘質土で、大小礫を多く含んでいる。

### 第2節 調査の方法

調査区中央部に打設した任意のグリッド原点をMA50として、この杭から磁北に合わせた南北基線とこれに直交する東西基線を設け、4m×4mのグリッドを設定した。また、南北基線には2桁の算用数字、東西基線にはアルファベット2文字の組み合わせを付し、各グリッドの



第4図 調査範囲図

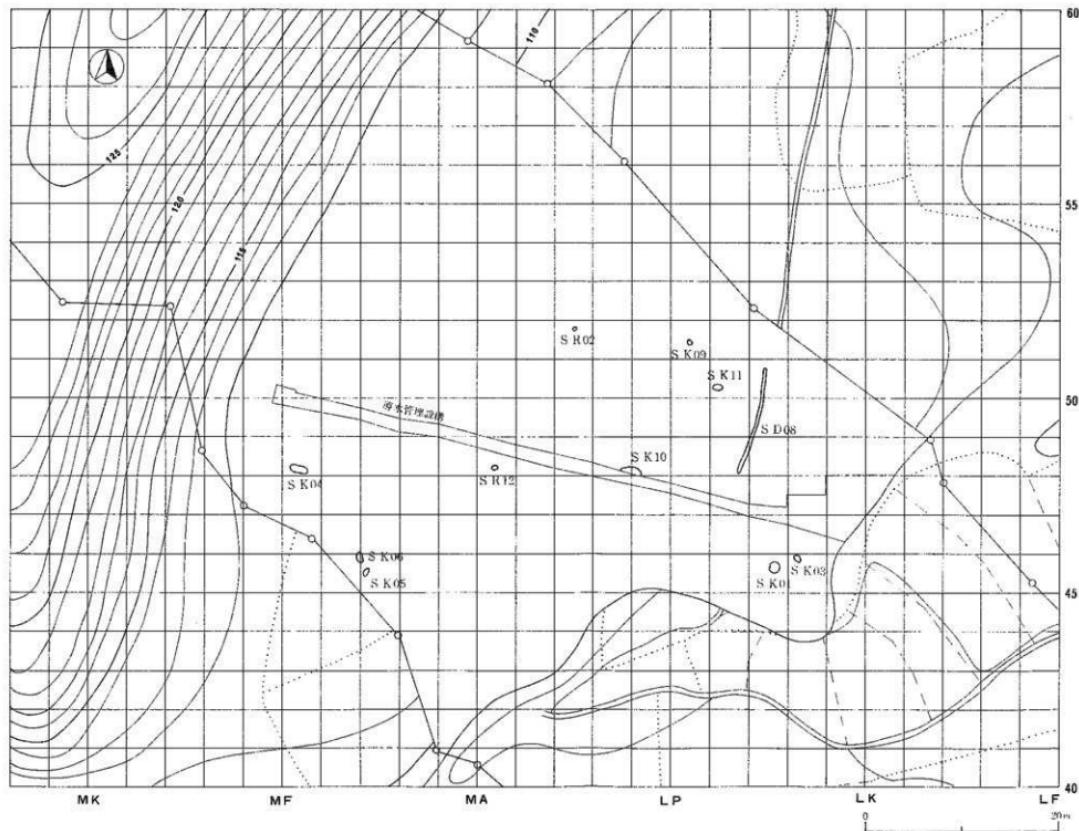


第5図 調査区の基本土層模式図

名称は南東隅の交点の算用数字とアルファベットを組み合わせて呼称した。遺構等の実測は、各グリッド統を利用して測量し、縮尺は原則として20分の1としたが、土器埋設遺構は10分の1とした。また、これらの遺構平面図と調査範囲図等から遺構配置図など必要な図面を作成した。

### 第3節 調査の経過

5月20日から24日まで、調査に先立って伐採された杉等の除去と、範囲確認調査時に入れた試掘溝の耕土除去を行う。27日、調査区北西側から粗拂りと遺構確認作業を開始し、31日からは同区南東側からも調査を開始する。6月19日、遺構が検出されなかった調査区北西部の調査を終了し、この地区を耕土場所にあてる。同月21日までSK01・03、SR02を検出。7月19日までSK04・05・06・07・09・10・11、SD08、SR12を検出。また、SK04とSK07は、当初重複する遺構としたが、同一遺構と判明し、SK07の遺構番号を欠番とした。23日、精査と各遺構の掘り下げを終了。翌24日、発掘後の調査区全景の写真撮影。25日、全検出遺構の調査を終了。7月26日、発掘器材等を搬出して、虫内Ⅱ遺跡の発掘調査を完了した。



第6図 連査配置図

## 第4章 調査の記録

本調査では、土坑8基、上器埋設遺構2基、溝状遺構1基の計11遺構が検出された。このうちSR02は第Ⅲ層中で検出されたが、他の遺構は第V層上面で検出された。遺物は第I～IV層及び遺構覆土中から縄文時代の土器と石器、フレークなどが出土した。

### 第1節 検出遺構と遺構内出土遺物

#### 1. 土坑

##### SK01(第6・7図、図版2)

LM45グリッドで確認された。平面形は長軸(北西～南東)120cm×短軸(北東～南西)106cmの略円形を呈し、確認面からの深さ91cmである。底面は平坦で、そのほぼ中央部に径24cm、底面からの深さ24cmのピットが1個掘られている。壁はほぼ垂直に近く立ち上がっており、北西壁はオーバーハングしている。覆土は8層に分けられた。1～4層は炭化物少量と黄褐色土粒子や褐色土粒子を多量に含み、5層は黒褐色土粒子を少量含んでいる。各層とも堅くしまっており、8層下部(土坑底面)には、長さ14～17cmの細長い疊2個と半丸の疊1個があった。自然堆積土と考えられる。

遺物(第8図S 1～4、図版6)は、6層から石錐1点と石匙1点、8層から擦石1点、5層から石核1点、また、フレークが2層から2点、5層から2点、7・8層から各1点出土した。S 1は、素材とした剥片の両側縁を、両面から加工して尖がらせ錐部を作出している。S 2は縦型の石匙である。裏面右側縁に押圧剝離のための打面を用意した、いわゆる縦型の石匙である。つまみ部はバルブ付近に作出されている。S 3は石核である。長さ3cm前後、幅1cmほどの剥片を取っている。S 4は精凹疊を素材とした半円状扁平打製石器で、片面と長軸方向の片側縁が擦られ、平滑な面となっている。また、火熱を受けて赤みを帯びており、煤けて黒くなっている部分がある。フレークは石器製作時の破片で、うち2層出土の1点は火熱を受けている。

##### SK03(第6・7図、図版2)

LL45グリッドで確認された。平面形は長軸(北西～南東)82cm×短軸(北東～南西)62cmの梢円形を呈し、確認面からの深さ27cmである。底面はほぼ平坦である。壁は急傾斜で立ち上がっている。覆土は3層に分けられた。1層は炭化物と径5cm前後の小石を少量と若干の遺物を含んでいる。層全体のしまりは弱く軟らかい。2層は径5～6cmほどの小石を多量に含んでいる。全体に堅くしまっている層である。3層は3cm前後の小石を少量含んでいる。層のしまりは1

層よりあり、やや堅い。これらの層は自然蓄力により堆積したものと考えられる。

遺物(第8図1・2、S5、図版6)は、1層から縄文土器片が2片と、フレークが1点出土した。1・2は深鉢形土器の体部の破片と思われる。1はL R縄文、2は原体が判然としないが磨消縄文の手法による文様が施されている。縄文時代後期に属するものと思われる。フレークは石器製作時の破片である。

#### S K04(第6・7図、図版2・3)

ME48グリッドで確認された。平面形は長軸(北西—南東)184cm×短軸(北東—南西)75cmの楕円形を呈し、確認面からの深さ37cmである。本土坑のプランを確認した面もしくはやや上方に7個の疊があり、そのうちプラン内側に6個、外側に1個ある。これらの疊は上層断面観察から本土坑に伴うものと判断でき、意図的に配されたものと考えられる。壁は扁平な河原石5個(うち1個はプラン外)と棒状の疊2個である。棒状の疊1個は立石であったが、発掘過程において掘りすぎたため倒れてしまった。すべての疊は火を受けていなかった。上坑底面はほぼ平坦である。壁は急傾斜で立ち上がっている。覆土は2層である。層全体に砂礫粒を少量含み、部分的に1~10cmの小石を少量含んでいる。また、植物根を少量含み、層下部には地山粒子を少量含んでいる。層全体のしまりは水気を多く含んでおり軟弱であった。本層に含まれる砂礫粒や小石などが部分的にまばらに(かたまって)入っていることから、人為的埋土と考えられる。

遺物は出土しなかった。

#### S K05(第6・7図、図版3)

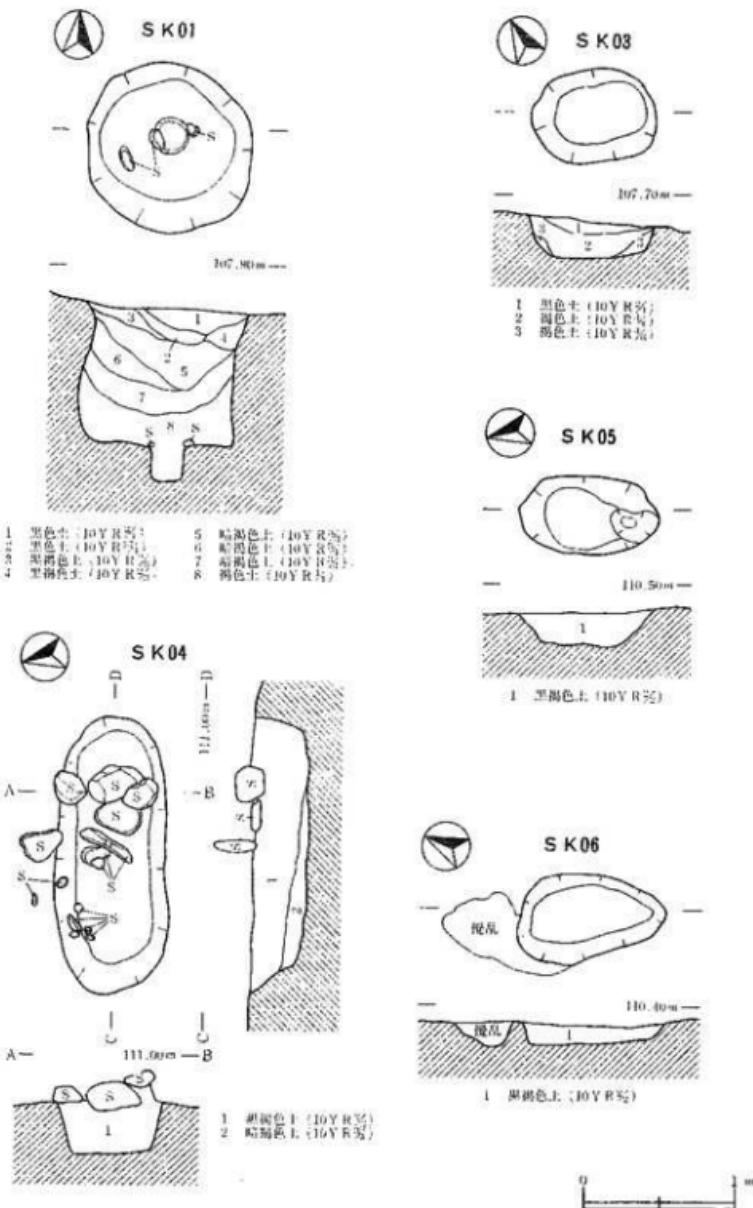
MC45グリッドで確認された。平面形は長軸(北東—南西)91cm×短軸(北西—南東)52cmの楕円形を呈し、確認面からの深さ29cmである。底面は平川である。壁はやや緩く立ち上がっている。北東壁は木の根で壊されている。覆土は1層で、砂礫粒と木の根を少量とフレーク4点を含んで、全体にしまりが弱く軟らかい。層に含まれる砂礫粒が底状に入っており、人為的埋土と考えられる。

遺物はフレークが4点出土した。いずれも石器製作時の破片である。

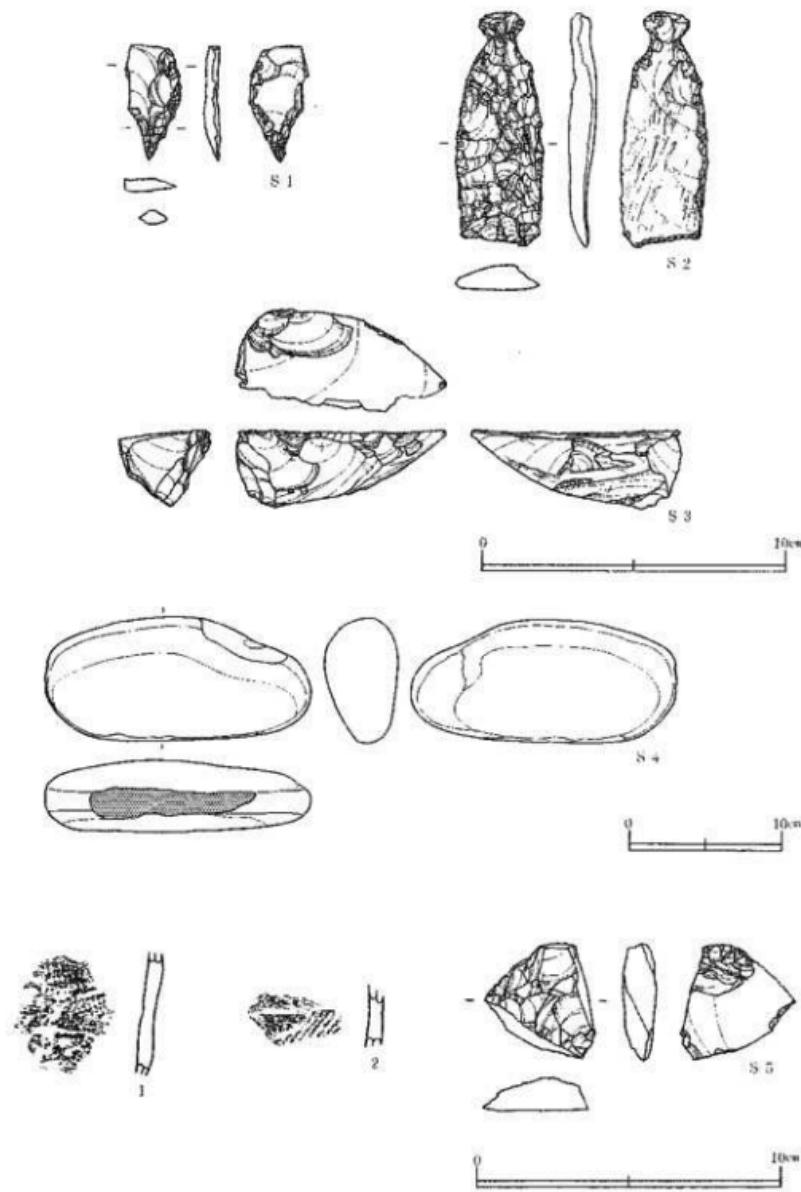
#### S K06(第6・7図、図版3)

MC45・46、MD45・46グリッドにかけて確認された。平面形は長軸(北西—南東)100cm×短軸(北東—南西)61cmの楕円形を呈し、確認面からの深さ16cmである。底面はほぼ平坦である。壁は急傾斜で立ち上がっている。北西壁を木の根によって壊されている。覆土は1層で、砂礫粒を少量と黄褐色土ブロックを少量含んでいる。層のしまりは弱く軟らかい。人為的埋土と考えられる。

遺物は出土しなかった。



第7図 SK01・03・04・05・06



第8図 造構内出土土器・石器

## S K09(第6・9図、図版4)

L O51グリッドで確認された。平面形は長軸(北西-南東)62cm×短軸(北東-南西)48cmの梢円形を呈し、確認面からの深さ19cmである。底面は西側から東へ傾斜している。壁はやや緩く立ち上がっている。覆土は2層に分けられた。1層は砂礫粒を少量と、3~4cmの小石を少量含んで、全体にしまりが弱く軟らかい。2層は砂礫を少量と、2~5cmの小石を少量含んでいる。また、黄褐色土粒子が少量遺沿いにまばらに含まれている。しまりは1層よりあり、やや堅い。自然營力により堆積したものと考えられる。

遺物は出土しなかった。

## S K10(第6・9図、図版4)

L P48、L Q48グリッドにかけて確認された。本土坑の南側半分ほどは、導水管埋設工事によって削平されていたが、平面形は残存部分からほぼ梢円形を呈していたものと推察される。残存する部分の長軸(北西-南東)は190cm×短軸(北東-南西)は66cmで、確認面からの深さ8cm(南東壁側)~22cm(北西壁側)である。底面はほぼ平坦であり、北西壁側から南東壁側へ緩く傾斜している。壁は垂直に近く立ち上がっている。覆土は全体に砂礫粒を少量と、部分的に炭化物を若干、層下部に黄褐色土粒子を少量含む、しまりのある單一層である。砂礫粒や黄褐色土粒子などの含有物が部分的にかたまって入っており、投棄された状況を呈していることから、人為的堆土と考えられる。

遺物は出土しなかった。

## S K11(第6・9図、図版4)

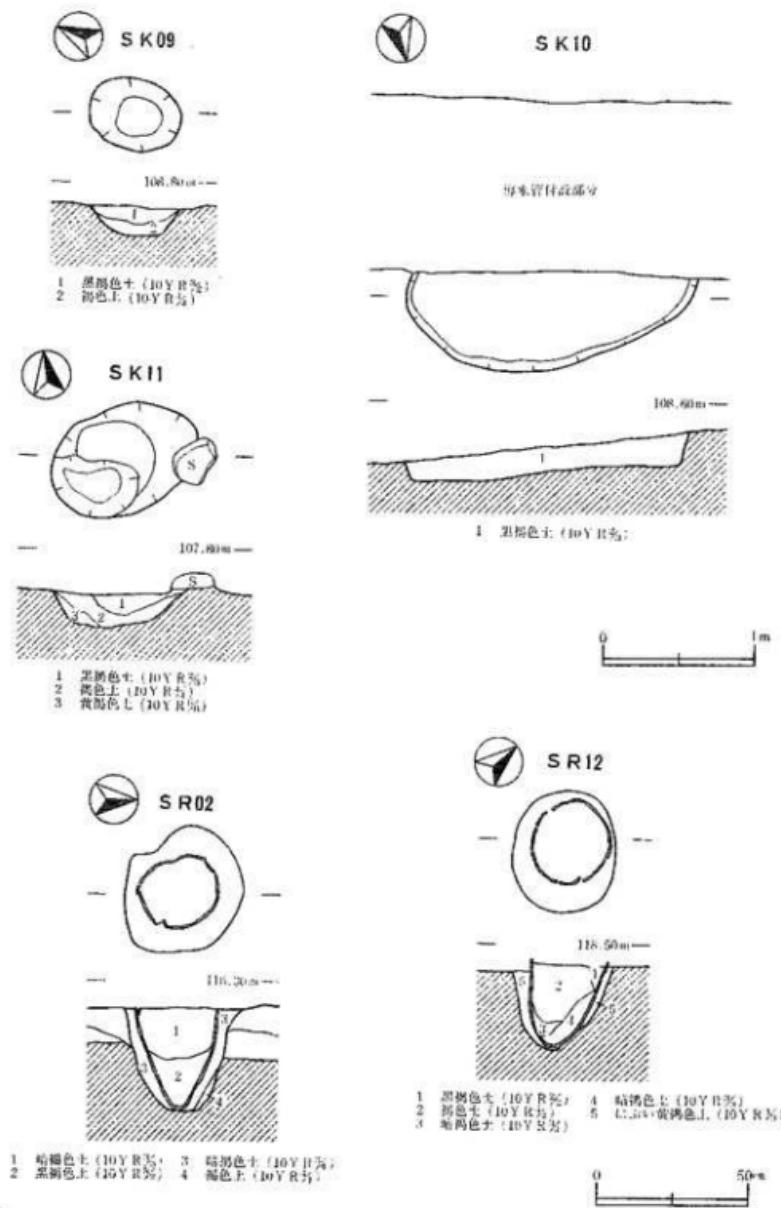
L N50グリッドで確認された。平面形は長軸(北東-南西)102cm×短軸(北西-南東)70cmの梢円形を呈し、確認面からの深さ32cmである。底面はやや丸みを帯びている。壁は北東壁側が緩やかに立ち上がっているが、他壁は急傾斜で立ち上がっている。覆土は3層に分けられた。1層は砂礫粒を少量と、3cmほどの小石を若干含み、全体にしまりがある。2層は砂礫粒を少量含んでいる。しまりは1層より強く、堅くしまっている。3層とした部分は、当初は掘り方の一部と判断し掘ったが、その後木の根が入り込んで、その根が腐って軟らかくなつた搅乱部分であることが判明した。自然營力により堆積したものと考えられる。

遺物は出土しなかった。

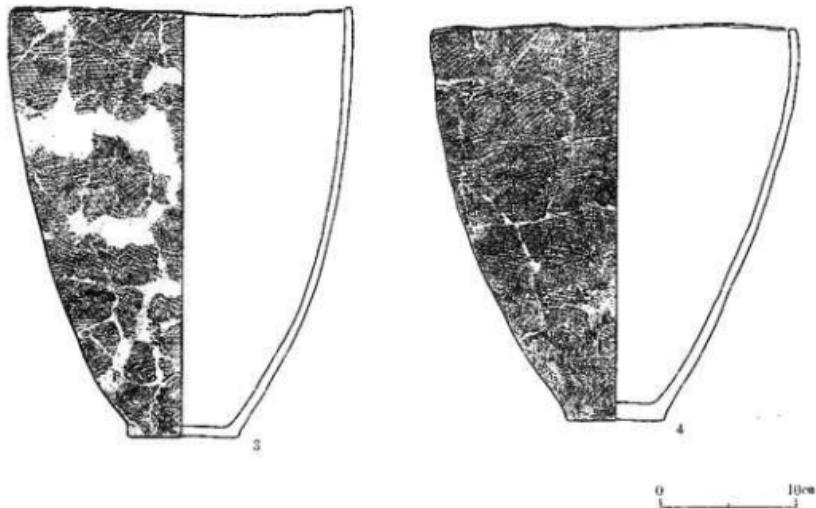
## 2. 土器埋設遺構

## S R02(第9・10図、図版5)

L R51グリッドで確認された。土器埋設用の掘り方は、平面形が径約45cmの梢円形を呈し、確認面からの深さは34cmである。底面は平坦で、壁は急傾斜で立ち上がっている。土器は掘り



第9図 SK09・10・11・SR02・12



第10図 SR02・12出土土器

方のほぼ中央部に正位に埋設されている。土器底面は掘り方底面には接している。

覆土は4層に分けられた。1・2層は埋設された土器内の覆土で、3・4層は掘り方内の覆土である。1層は指頭大のにぶい黄褐色土ブロック多量と小砾を少量含み、2層は黄褐色土粒子と炭化物を少量含んでいる。3層は黄褐色土粒子を若干含み、4層は暗褐色土粒子を少量含んでいる。

埋設土器(第10図3、図版6)は、底部から内湾ぎみに立ち上がって口縁にいたる深鉢形土器である。口縁部および体上半部の一部を欠損しているが、ほぼ完形に近く、口径24.9cm、底径8.1cm、器高31.5cmを測る。全面にLR縦文が横位に施文されている。

#### SR12(第6・9図、図版5)

L T48グリッドで確認された。土器埋設用の掘り方は、平面形が長軸(北東—南西)40cm×短軸(北西—南東)34cmの橢円形を呈し、確認面からの深さ24cmである。底面は丸底ぎみで、壁は急傾斜で立ち上がっている。土器は掘り方の中央より西寄りに正位に埋設されている。土器底面は掘り方底面から若干上に位置しており、土器下端部の一部は掘り方西壁下部に接している。

覆土は5層に分けられた。1～4層は埋設された土器内の覆土で、5層は掘り方内の覆土である。1・2層はしまりの弱い軟質土で、うち2層には、にぶい黄褐色粒子と小砾を多量に含んでいる。3・4層は、1・2層よりしまりが強く硬質土ぎみである。また、4層は砂質土粒子を少量含んでいる。5層はしまりのある硬質土で、小砾を少量含んでいる。

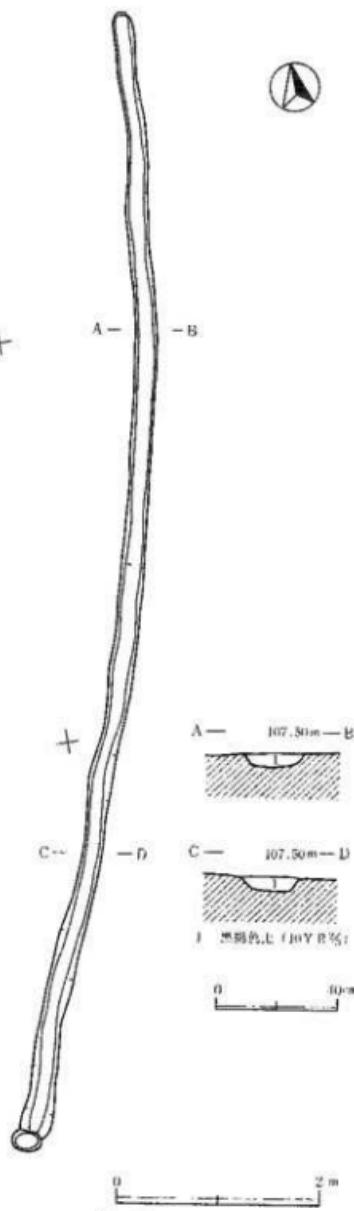
埋設土器(第10図4、図版6)は、口縁部が若干内湾する深鉢形土器である。口縁部の一部を欠損しているが、口径26.8cm、底径7.2cm、器高29.2cmを測る。全面にLR繩文が不定方向に施文されている。

### 3. 溝状遺構

#### SD08(第6・11図、図版5)

LM48・49・50、LN48グリッドにかけて確認された。南北に延びている溝で、その長さ約11.4m、上面幅20~32cm、底面幅9~17cm、深さ4cm前後である。底面は部分的に木の根の攪乱や、地山に含まれている小礫が露出しているところがあり、いくぶん凹凸する箇所もあるが、そうした部分以外はほぼ平坦である。覆土は砂礫粒を少量と3cmほどの小石を数個含み、植物根と黄褐色土粒子を少量含む、しまりが弱くボロボロしている單一層である。自然堆積土と考えられる。

遺物は出土しなかった。



第11図 SD08

## 第2節 遺構外出土遺物

### 1. 土器

出土した土器は、コンテナ(規格54cm×34cm×9.5cm)で約3箱分である。このうち完形に近いものが一個体、接合によってある程度まで復元できたものが1個体で、他はすべて破片である。また、出土した土器の多くは、縄文時代後期～晚期のものであるが、前期、中期末の土器も若干出土した。

#### 縄文時代前期の土器（第12図5～7、図版7）

深鉢形土器の口縁部(5)、体部(6・7)の破片である。5はLR縄文が施された後に、口縁部に、同原体の閉端の回転施文が横位に3段施されている。6はLRとRL縄文による羽状縄文が横位に施されている。7はRL縄文で、ループ文が重段に施されている。

#### 縄文時代中期後半の土器（第12図8、図版7）

8は深鉢形土器の体部の破片である。RL縄文が縦位回転施文されている。

#### 縄文時代中期末～後期初頭の土器（第12図9～11、図版7）

深鉢形土器の口縁部(9)、体部(10・11)の破片で、9・10は同一個体である。9・10の口縁部には、口縁端部から降帯を垂下させた痕跡がある。その下には、刺突列のある隆帯が連続山形状に貼付され、隆帯下には沈線を沿わせている。この沈線の頂部下には、円形の刺突文が1個あり、これから鉤の手状の沈線を組み合わせた懸垂文が重下している。体部のLR縄文は沈線施文前に施されている。11はLR縄文を施した後に、縦位に曲沈線文を数条加えて、地文の縄文を区画し、その一方を磨り消している。

#### 縄文時代後期の土器（第12図12～32、図版7）

鉢形土器と思われる口縁部(15～21・27)、体部(12～14・22～26・28～32)の破片である。また、12と13、16と17、19と20は、各々同一個体である。12～14は横方向に2条の平行沈線と、この沈線間に刻み列が施されており、12・13はその文様の上下が無文で、14はその下方に縄文が施されている。原体は磨滅のため判然としない。15～32は磨消縄文手法による文様が施されており、15～17・19～32は地文としてLR縄文が、18はRL縄文が施されている。これらのうち、16～27は人組文をモチーフにした文様が横位に展開すると思われるが、他の詳細は不明である。また、18は口縁部に1個の角状の突起が、16・17は二股に分かれる突起が付けられており、15は口縁が小波状を呈するものと思われ、19～21は小波状部付近の破片である。27はLR・RL縄文を羽状に施した後人組文を描き、磨消したものである。32は外面に煤状炭化物が付着している。

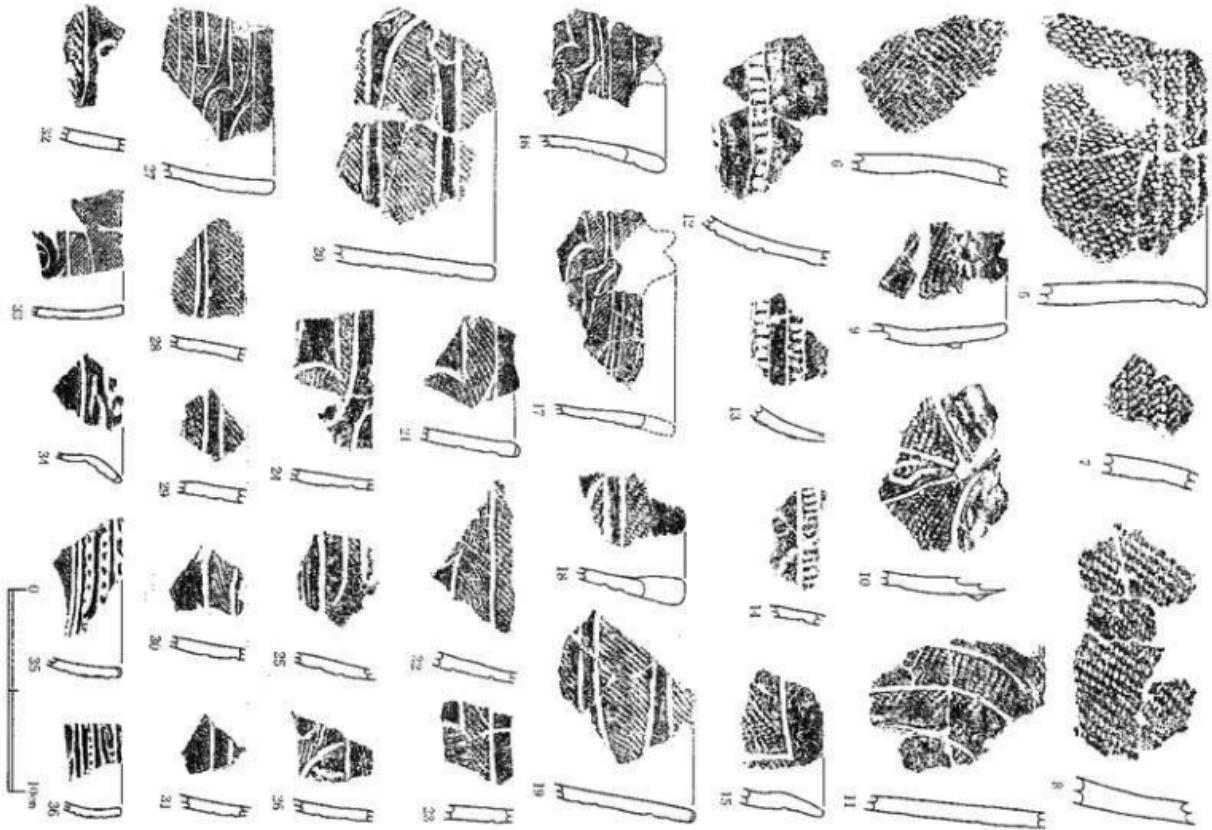
#### 縄文時代晚期の土器（第12図33～36、第13図37～59、図版7・8）

鉢形土器の口縁部(33~38)、体部(39・40)、深鉢形土器の体部(42・43)、小型の鉢形土器の体部(41)、台付浅鉢形土器の口縁部から体部(57・58)、体部(44)、注口土器の注口部(52・53)、肩部(46・48~50)、壺形土器の口縁部(47)、口縁部から肩部(51)、体部(45)、香炉形土器の天井部(54)の破片と、口唇と口縁部および体部の一部を欠いた壺形土器(59)である。48・49は同一個体である。33は口縁部にLR繩文が施され、その下には口縁部と体部を画する沈線が横位に1条施されている。体部には沈線による玉抱き三叉文が施されている。34は口唇にB突起と刻み目が施され、口縁部には三叉文、屈曲する部位には1条の沈線が横位に施されている。沈線下の体部にはLR繩文が施されている。35~38は口縁部に羊歯状文が施されており、35はその上の口唇にB突起と連繋する三叉文、その下に2条の横位沈線が、36~38はその上に横位沈線が1条、その下に2条(36・38)、1条(37)の沈線が施されている。ただし、37の下方の沈線は現状破片に認められるものである。また、38は口唇部に刻み目が加えられている。39~44はLR繩文を地文として、横位沈線が施されており、39~41・43・44は沈線が2条、42は1条認められる。46・48~50は三叉文・載痕列などが施されており、49・50の肩部には粘土粒が貼付され、48には刺突列がある降帯が横位に施されている。また、50は肩部下の載痕列に沿って沈線が1条と、それに連繋する2条の沈線が弧状に施されている。47は口縁部に横位沈線が1条施されている。51は口唇部に小突起が付されており、口縁部と肩部には刺突が加えられる降帯とその上下に2条の横位沈線が施されている。52・53には注口を巡る2条の沈線と、それに連繋する玉抱き三叉文が施されている。56は口縁部および肩部は無文で、口縁部下と肩部の間をくびれさせて段をもたせている。また、内外面とも丁寧に磨いている。54は香炉型土器の天井部の破片である。弧状をなす側縁部には三叉文が施され、その下に縁部に沿って沈線が1条加えられている。55は香炉型土器の体部、もしくは台付土器の台部のいずれかの破片と思われる。透かし部分を抱くように三叉文が描かれている。57は口唇に2箇1対のB突起が付され、口縁部には三叉文が施され、その下には結節沈線文と平行沈線が2条施される。沈線下の体部にはLR繩文が施されている。58は口唇に刻み目が施され、幅の狭い口縁部には、口縁に平行に載痕列とその下に2条の平行沈線が施されており、さらにその下の体部にはLR繩文地に対向するC字状の磨削文様と三角形の抉り込みが施される。また、口縁部の内面の口縁下には、1条の沈線が横位に施されている。59は口縁下に無文帶をもたせ、その下には三叉文が施されている。また、体部にはLR繩文を地文として、三叉文を基調とした文様を描き、頸部には3条、底部には2条の横位沈線を施している。なお、38・42の外面と58の内外面には、媒状炭化物が付着している。

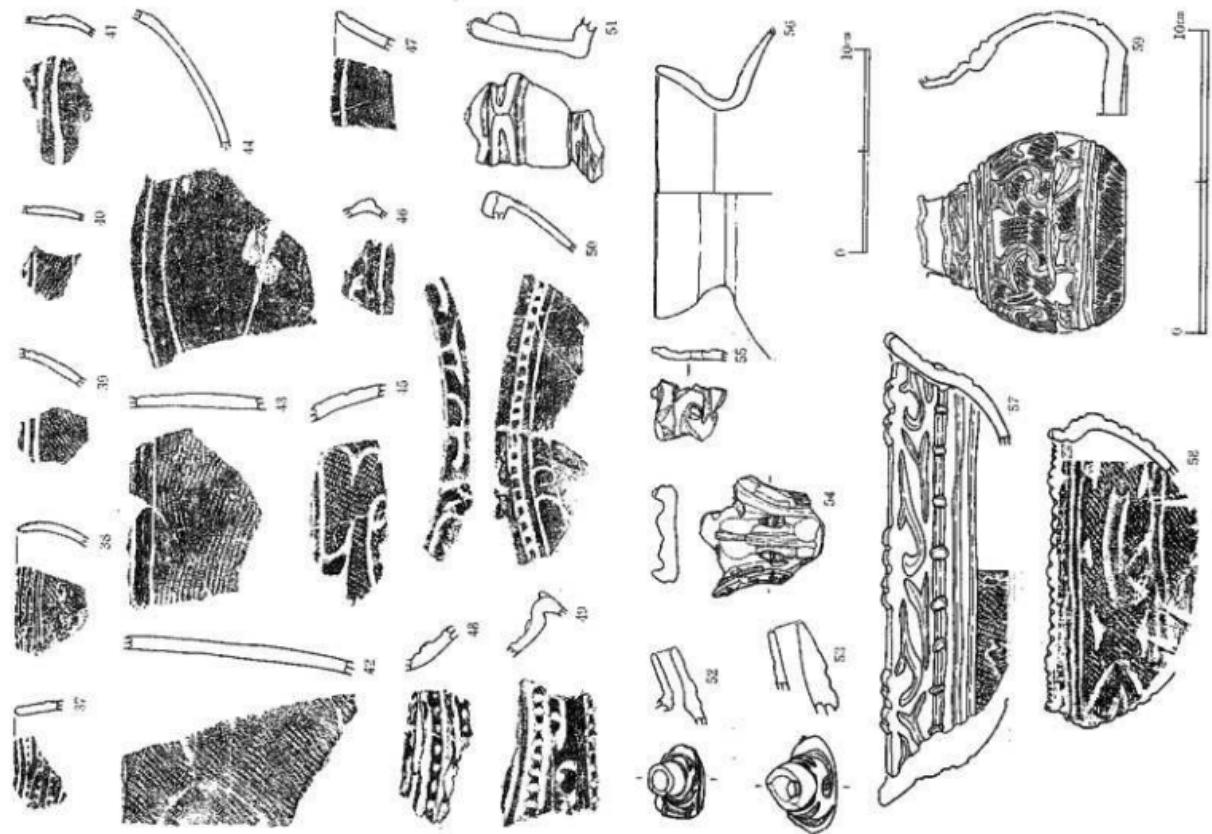
繩文時代後期～晩期の粗製深鉢形土器（第14図～第16図94～100、図版8・9）

繩文時代後期～晩期の埴輪におさまると思われる粗製深鉢形土器を一括した。第14図60・61、

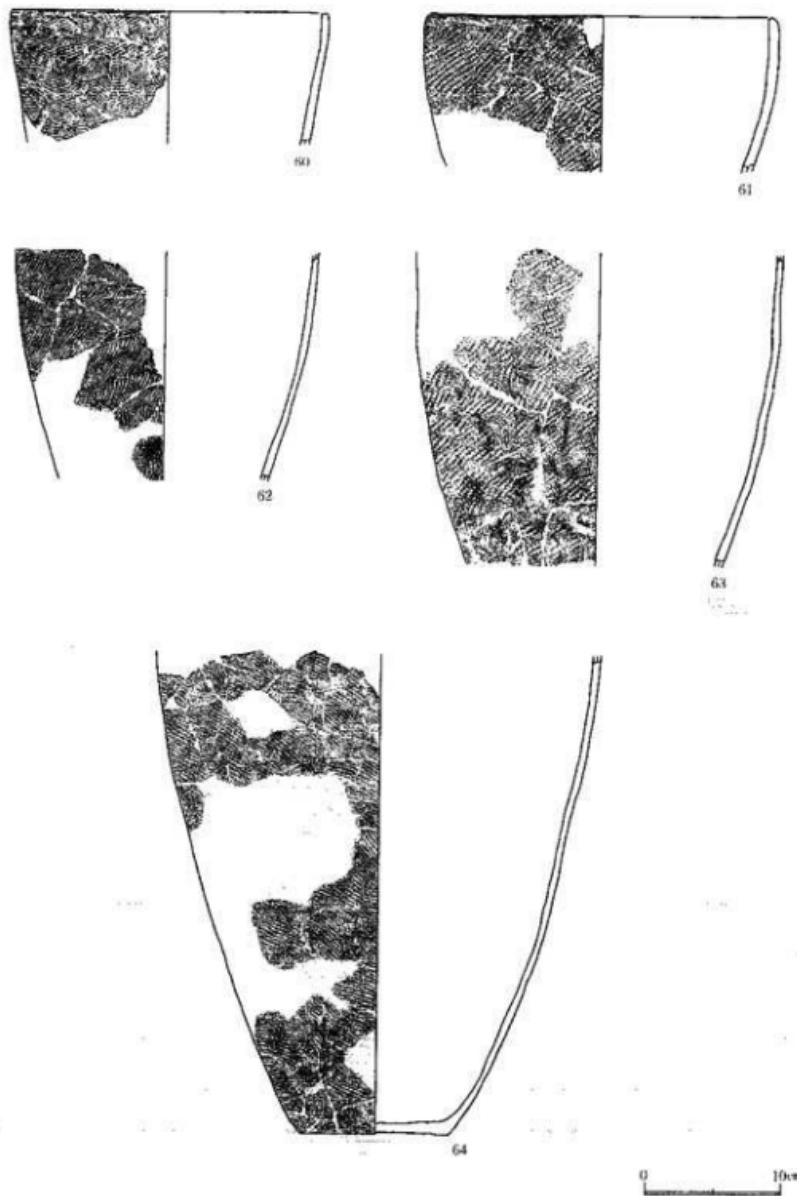
第2節 透構外出土器物



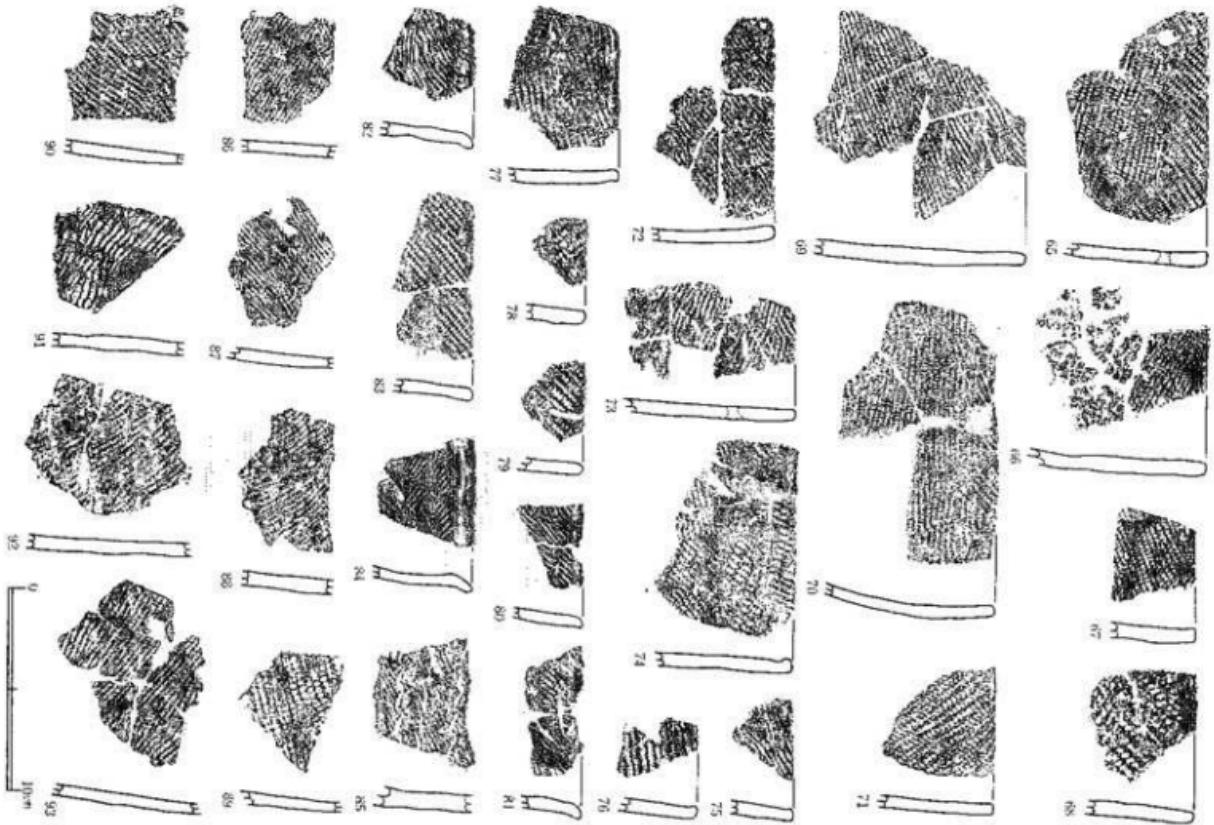
第12圖 透構外出土土器 (1)



第13図 通構外出土土器 (2)

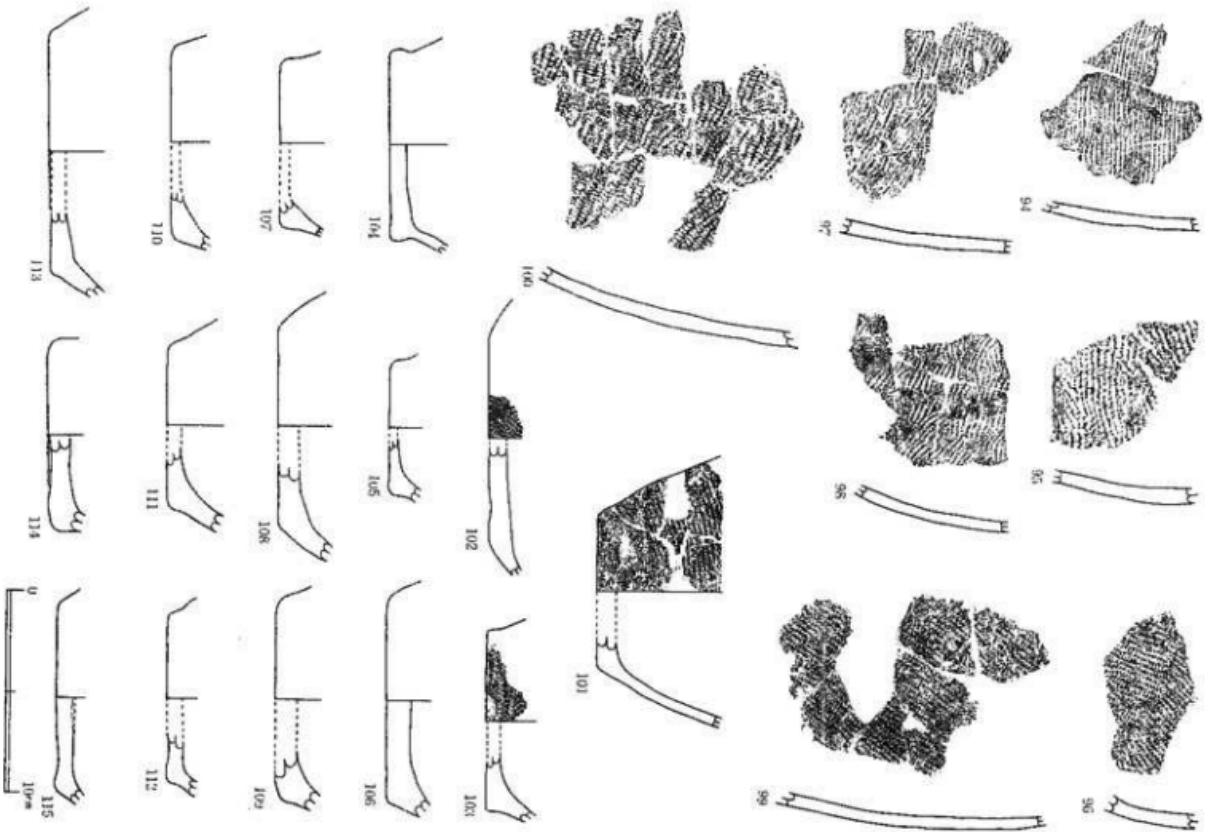


第14図 造構外出土土器 (3)

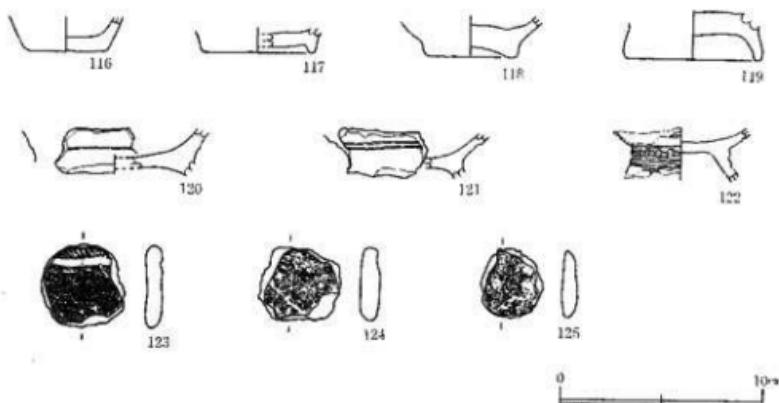


第15図 遺構出土土器(4)

第2節 滅國外邦工造物



第16圖 遺構外出土土器 (5)



第17図 造構外出土土器(6)

第15図65～84は、口縁部および体部上方の破片で、第14図62～64、第15図85～93、第16図94～100は体部および体部下方の破片である。これらの破片の器外面に施されている繩文は、R L 繩文(60・71・84・86・98)と、L R 繩文(61～70・72～77・79～83・85・87～90・92～96・99・100)およびL 捻糸文(91)、R 捻糸文(97)である。また、85～87は、繩文が施された後に結節回転文が横位に施されている。60・65・68・73・98は、他の資料の繩文がほぼ一定方向に施文されているのに対して、その方向が不定である。65・73は口縁下に補修孔が1個認められる。この孔は、外面から内面に向けて穿たれている。

なお、器内外面に煤状炭化物が付着している資料が多く認められる。内面だけに付着している資料は87だけで、外面だけに付着している資料は、60～62・64・66・69～71・74・75・77・78・83・84・86・88・96・99と多く、内外面に付着している資料は、63・90・100・101である。

#### 底部(第16図101～115、第17図116～118、図版9)

本遺跡から出土した底部は、上底ぎみのものが主であり、平底と思われるものは、103・106・108である。101は底部から体部下方の破片で、L R 繩文が施文されている。102・103にもL R 繩文が施文されている。

#### 台付土器の台部(第17図119～122)

これらのうち120～122には、沈線が横位に施されている。120・121は沈線が1条施されている。122は底部に1条、台部に2条の平行沈線が施されており、その平行沈線間には、刻み列が施されている。

## 2. 土製品(第17図123~125)

出土した土製品は、円盤状土製品3点のみである。すべて素材とした土器破片の縁辺を加工して円形状に仕上げている。123は沈線と縦文が認められるが、他の2点は磨滅のため不明である。

## 3. 石器

出土した石器は、石鏃・石槍・石匙・トランシェ様石器・石鎧・スクレイバー・磨製石斧・打製石斧・石剣・石棒・半円状扁平打製石器・凹石・磨石などである。その出土点数は完形のものと欠損したものなどを合わせて89点である。また、石核、フレーク、チップがコンテナ(規格54cm×34cm×9.5cm)で6箱分出土した。

**石鏃**(第18図S 6~9、図版10): 凹基無基縫(S 6~8)、凸基有茎縫(S 9)の2種類がある。全て両面に1次加工が施されているが、S 6は片面に、S 8は両面に1次剥離面を残している。

**石槍**(第18図S 10~15、図版10): S 12・13は両面が二次加工されているが、S 10・11は側縁に剥離が加えられているだけで、両面に1次剥離面を残している。S 14・15は尖頭部から胴部を欠損しているが、残存する部位の両面は二次加工されている。また、S 12は基端を欠損している。

**石匙**(第19図S 16~25、第20図S 26~32、図版10): 縦型(S 16~23・29~32)と横型(24~28)の2種類がある。つまみ部は、素材とした剥片の打面側に作られているものが大半であるが、S 23は素材の末端側に作られている。S 17は背面の全面に二次加工が及んだ丁寧な作りである。S 29は刃部を、30~32はつまみ部を欠損している。

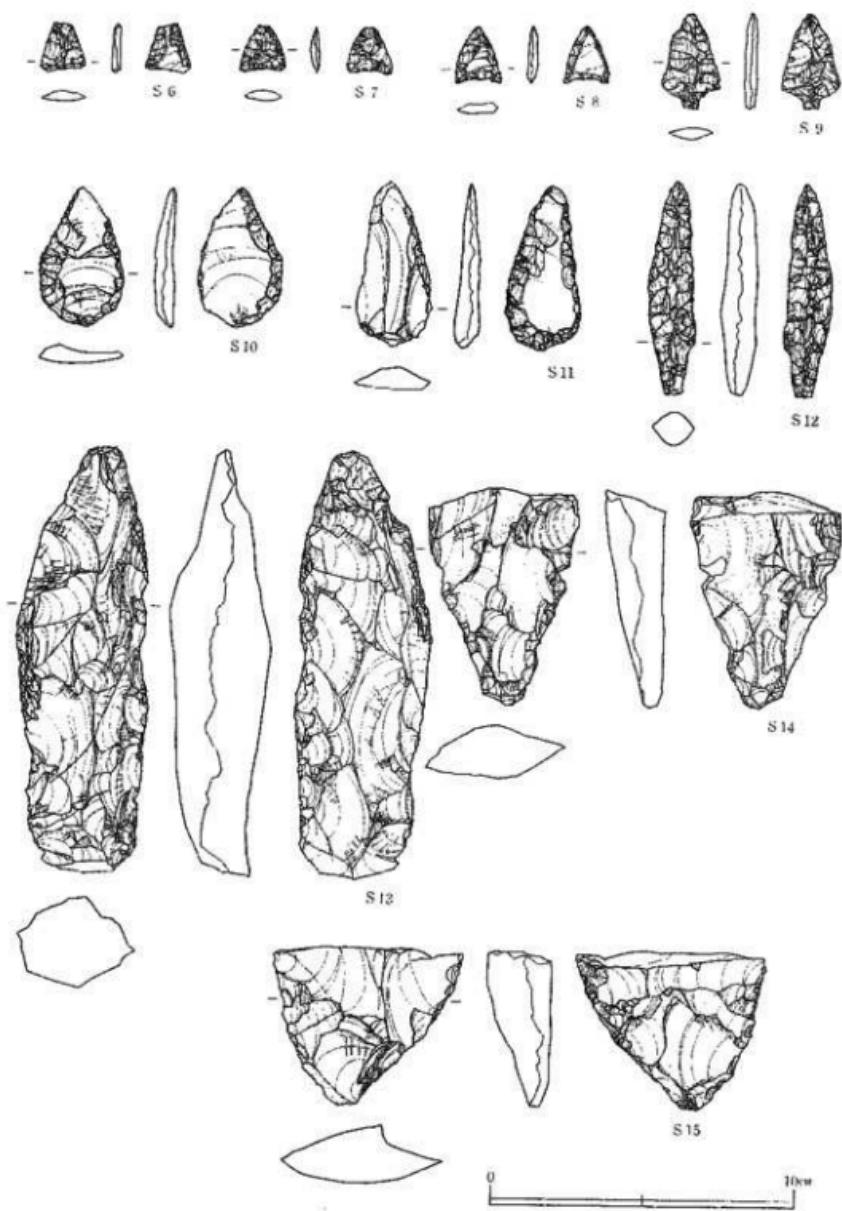
**トランシェ様石器**(第20図S 33、図版10): 横長の剥片を用い、1次剥離面を刃部としているものである。

**石鎧**(第21図S 34~45、第22図46~54、図版10・11): これらは素材とした剥片に施された二次加工の度合いによって、片面加工のもの(S 34~45)、両面加工のもの(S 46~53)とにわけられた。また、基部よりその下方がいくらか広がるもので、ほぼ左右対称となるが、S 51は片側縁が基部から体部中央少し下まで抉られており、左右非対称形を呈している。

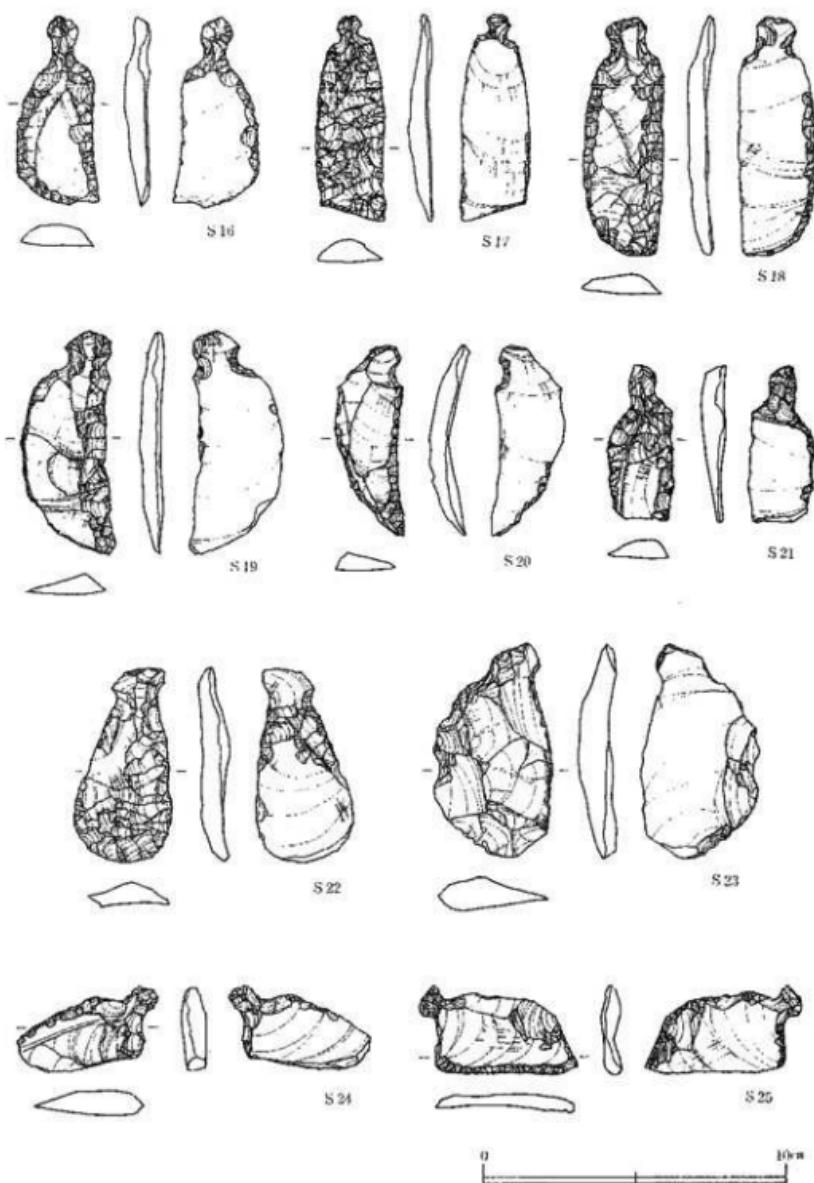
**スクレイバー**(第22図S 54・55、第23図S 56~61、図版11): 主に素材剥片の側縁に二次加工が施されて、刃部が作出されているものである。S 56・57・59~61は側縁に、S 54・55・58は側縁および末端に作出されている。また、S 56は長軸方向の両端に抉りをもっている。

**磨製石斧**(第23図S 62・63、図版11): S 62・63は、断面形がほぼ開丸長方形を呈する。S 62は刃部側を欠損しているが、S 63と共に定角式磨製石斧である。

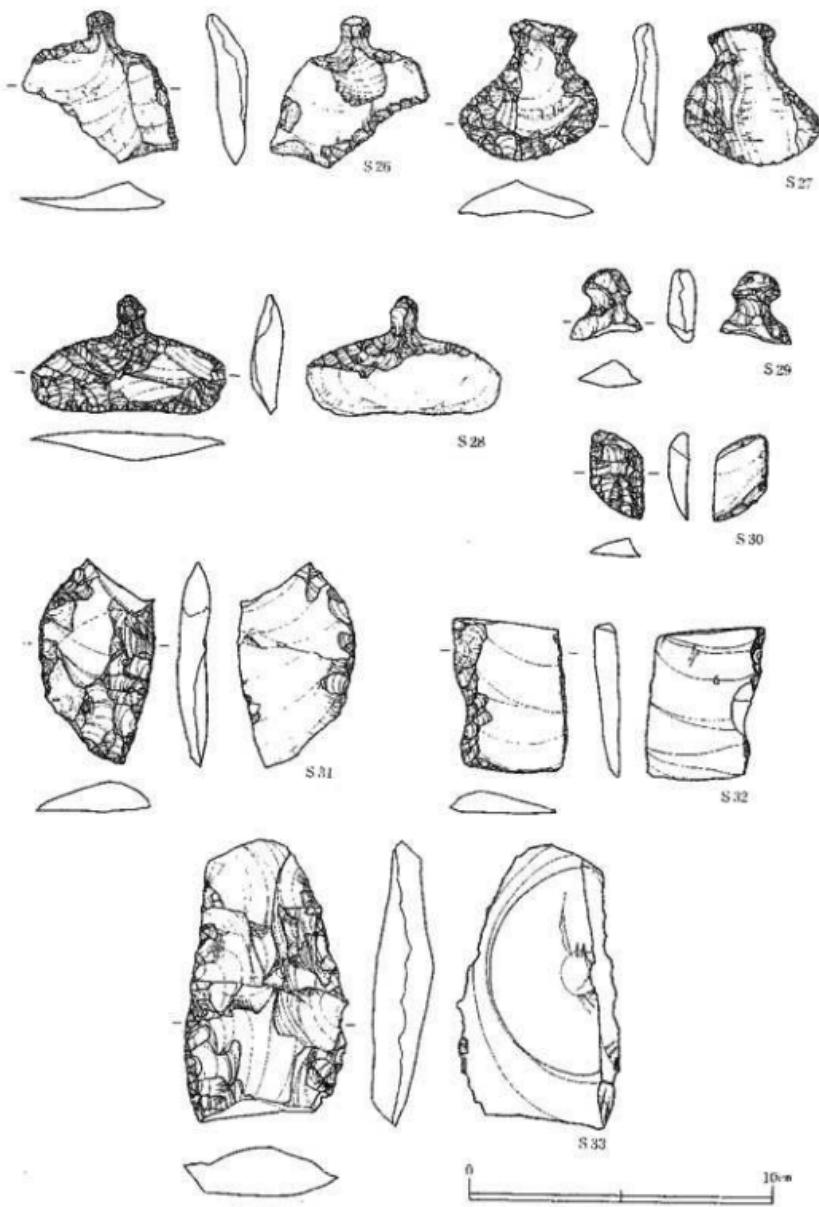
**打製石斧**(第24図S 64~66、図版11): S 64は長軸方向の両端がすぼまるラグビーボール状に



第18図 造構外出土石器(1)

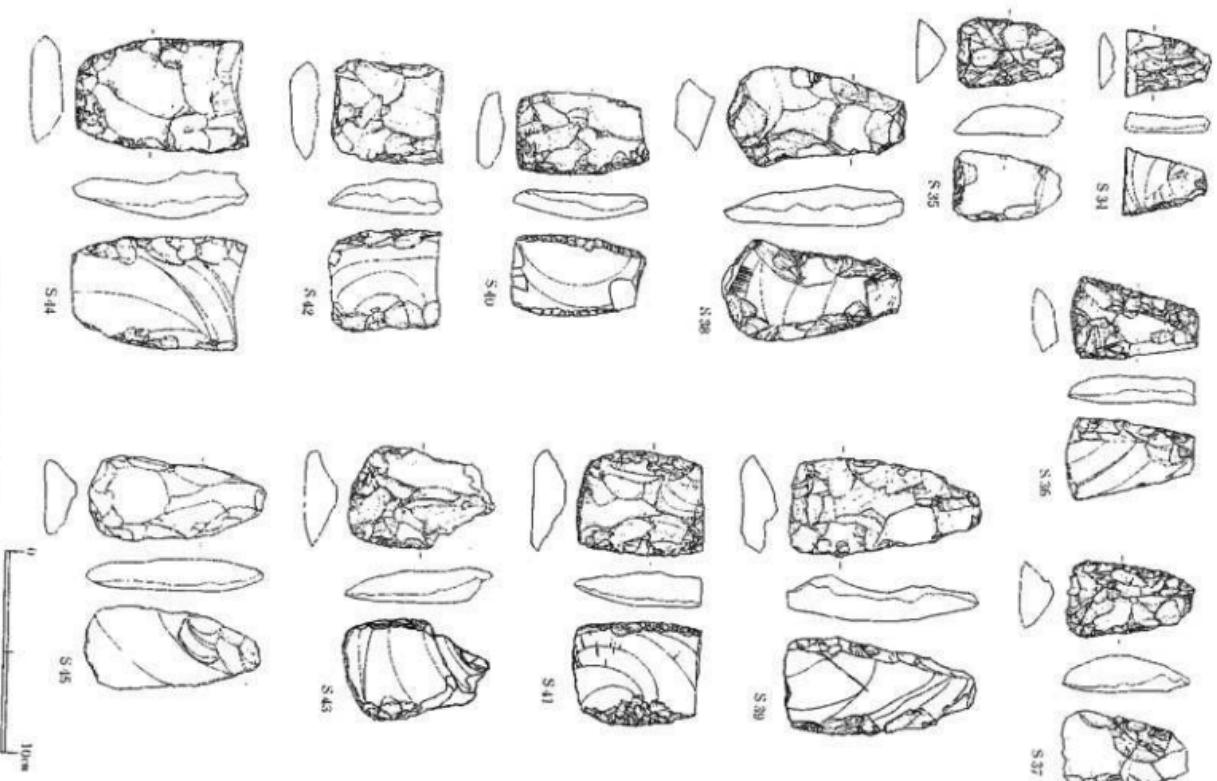


第19図 造構外出土石器 (2)

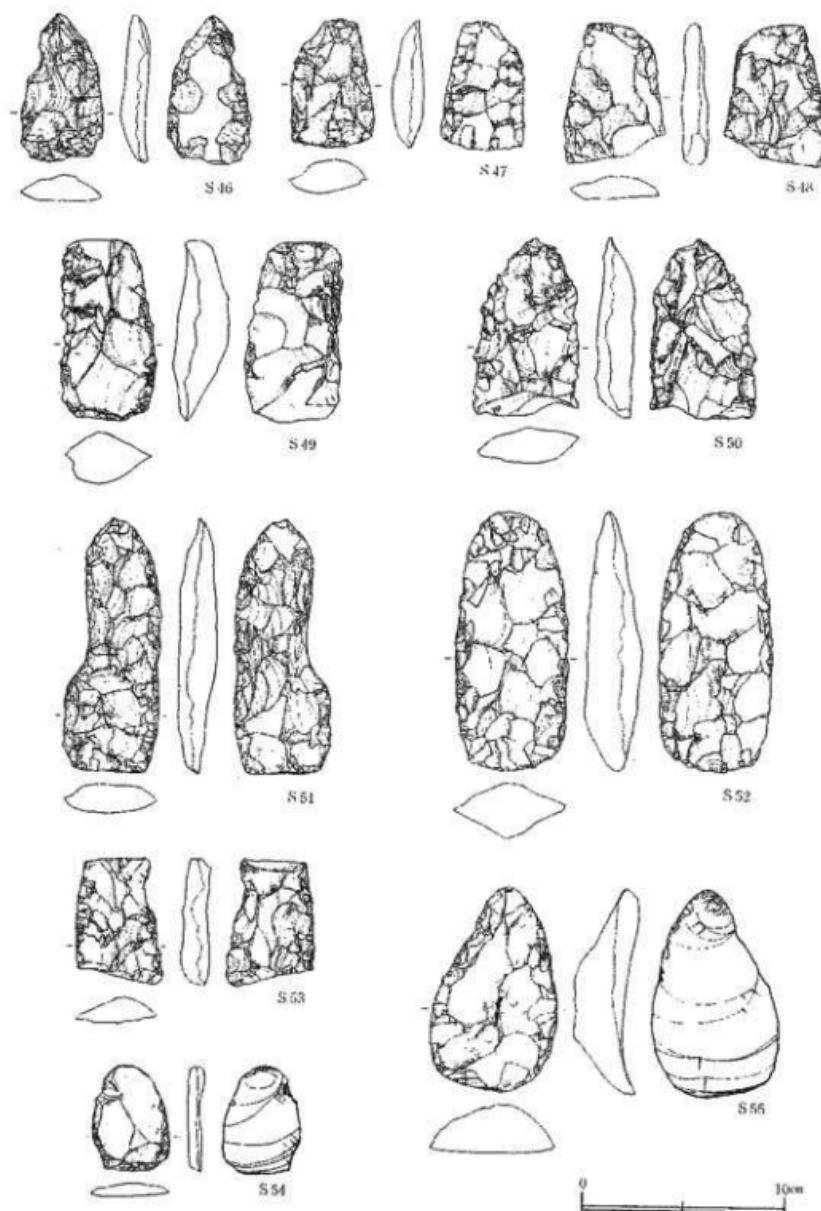


第20図 造構外出土石器(3)

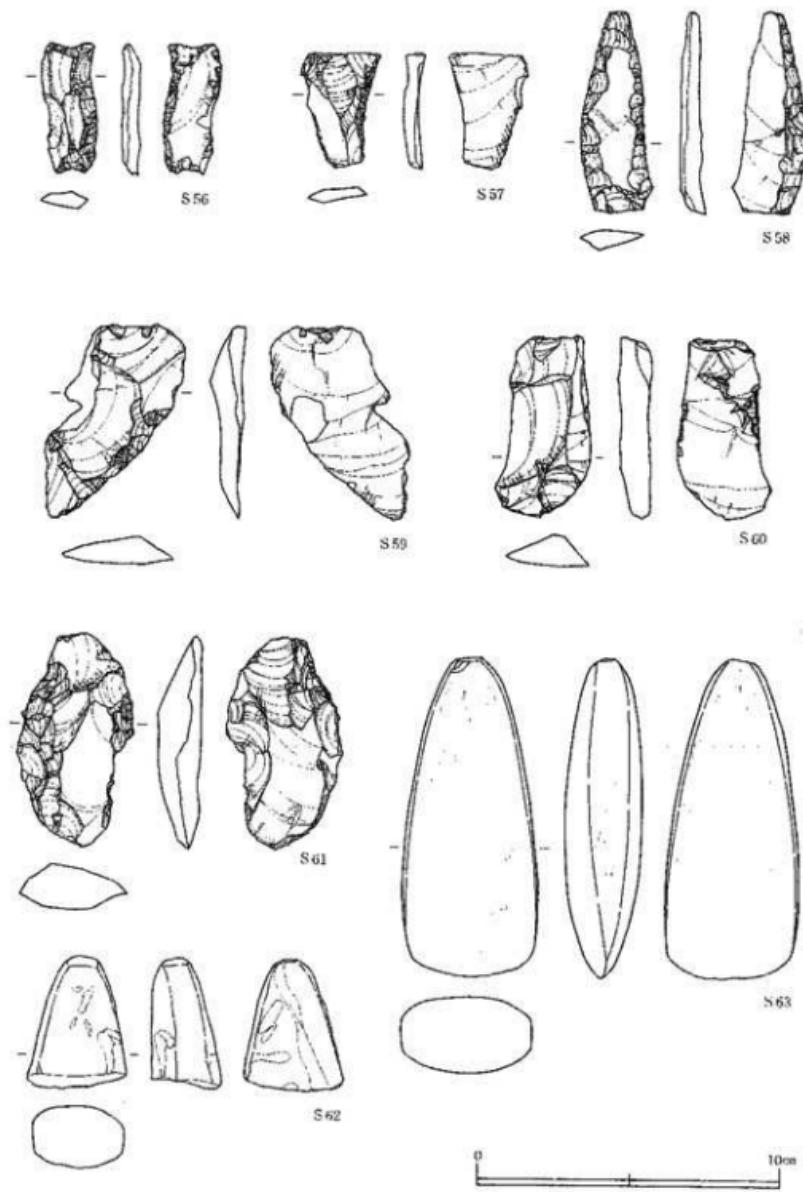
第2節 遺跡外出土遺物



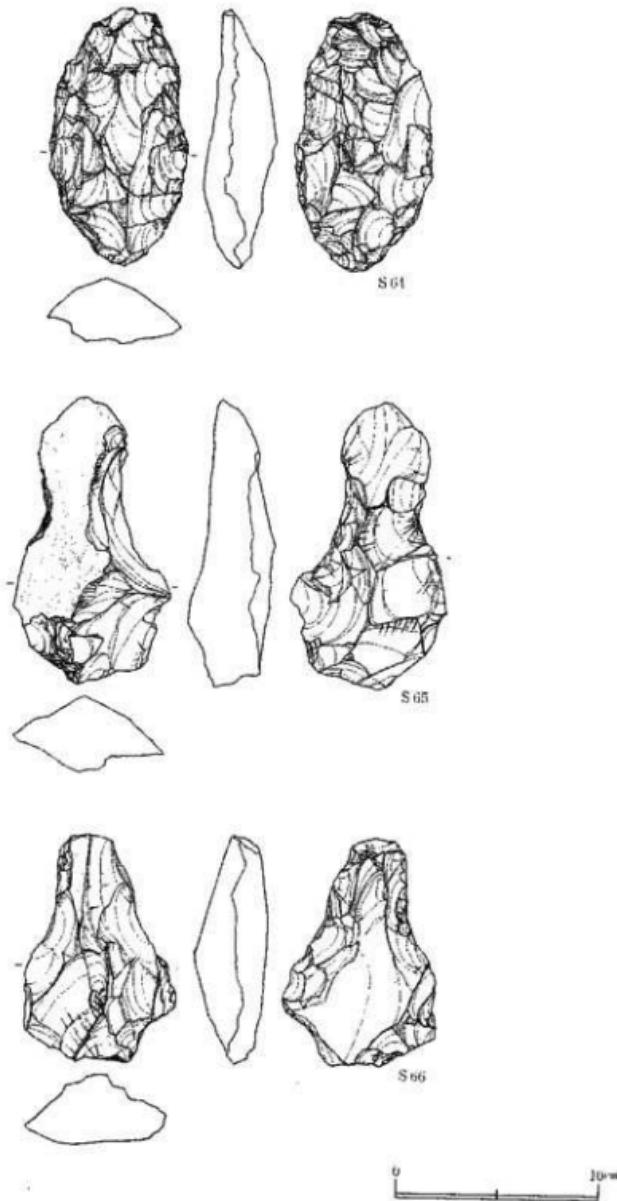
第21図 遺跡外出土石器(4)



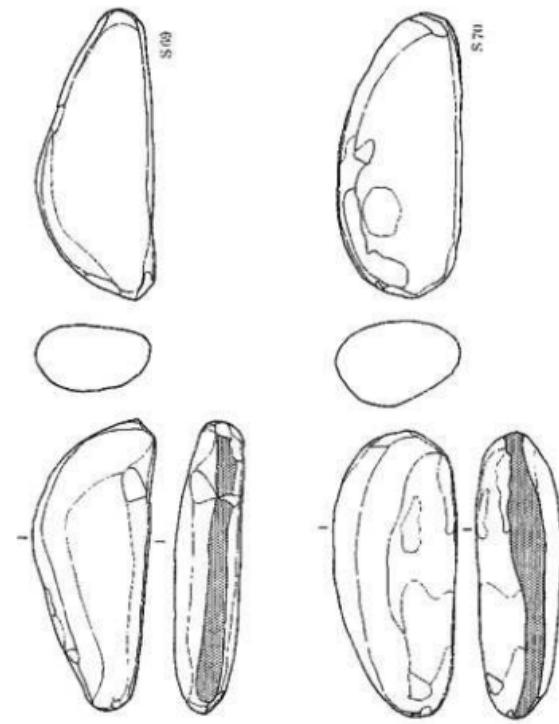
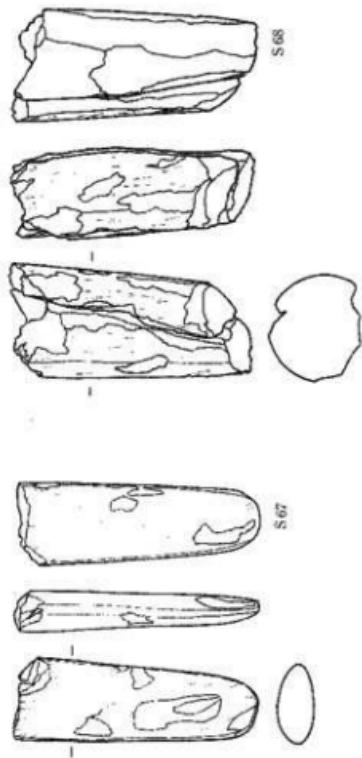
第22図 造構出土石器 (5)



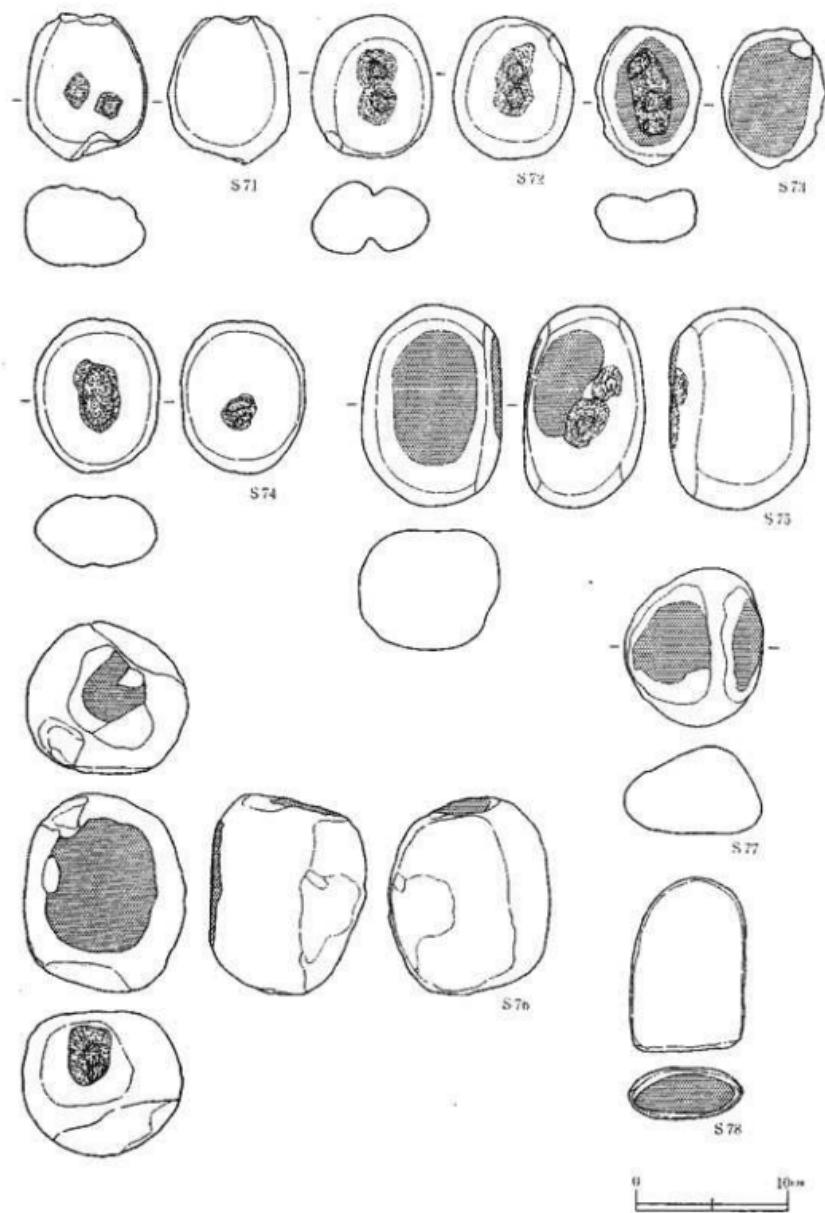
第23図 遺構外出土石器 (6)



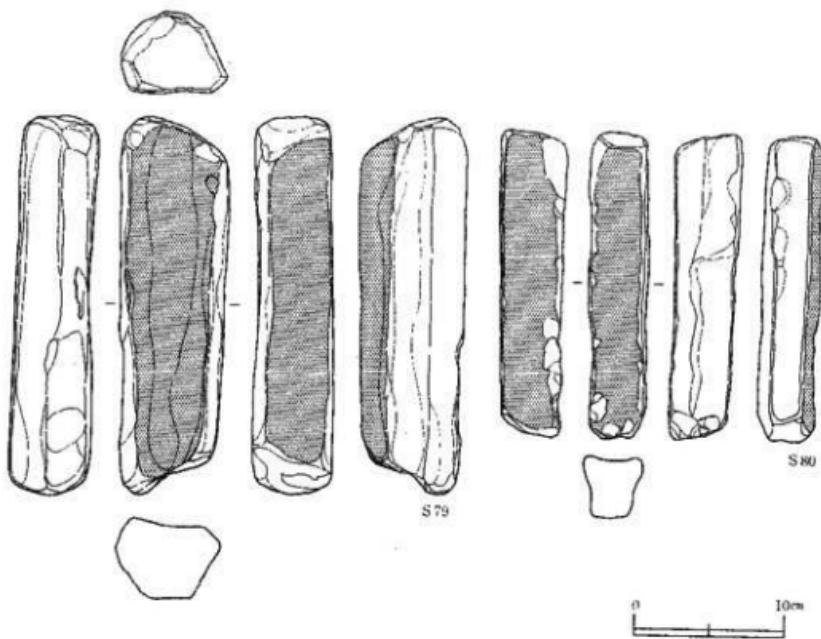
第24図 遺構外出土石器 (7)



第25圖 遺構外出土石器 (8)



第26図 造構出土石器(9)



第27図 遺構外出土石器(10)

成形されており、S65・66は撥形に成形されている。

**石剣・石棒**(第25図S67・68、図版11)：S67は石剣の破片で、遺存する部位の全面は研磨されている。S68は石棒の破片で、全面研磨されている。

**半円状扁平打製石器**(第25図S69・70、図版12)：長辯円形の扁平な転錐を素材として、長側縁の一方を両面から打ち欠いた後に擦ることによって、幅1cm前後の平滑面を作出している。全体に風化が著しく、刃部作出の際の剝離痕がほとんど見えなくなっている。

**凹石**(第26図S71～76、図版12)：いずれも円錐を素材としており、S72・74は両面に凹みが作られ、S71・73・75・76は一面に凹みが作られているものである。また、S71はその短軸両端に打ち欠きによる抉りがあり、敲石としても使われたもので、S73・75・76は2面に磨面が認められ、磨石としても用いられたものであると考えられる。

**磨石**(第26図S77・78、第27図S79・80、図版12)：円形や梢円形および角柱状の礫を素材として、その平面や側面を磨面としたものである。S77は両面を、S78は長軸方向の一方の平面を磨面、S79・80は長軸方向の2面を磨面としたものである。また、S79・80は磨減って凹んでいる。

括番	図版番号	出土地区	器種	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	石質
8-S1	6-S1	SK01	石錐	39	19	6	(3.69)	頁岩
S2	S2	SK01	石匙	78	29	9	18.34	頁岩
S3	S3	SK01	コア	69	26	35	(43.18)	頁岩
S4	S4	SK01	擦石	175	82	48	915.58	安山岩
S5	S5	SK03	剝片	39	37	11	(14.72)	頁岩
18-S6	10-S6	LP45	石鎌	17	15	4	(0.75)	頁岩
S7	S7	MC47	石鎌	16	15	4	(0.59)	頁岩
S8	S8	LN46	石鎌	18	16	4	0.78	頁岩
S9	S9	LM46	石鎌	32	19	5	(2.03)	頁岩
S10	S10	MB46	石槍	46	28	7	6.76	頁岩
S11	S11	LL48	石槍	55	25	9	8.63	頁岩
S12	S12	MC45	石槍	70.5	16	12	(12.14)	頁岩
S13	S13	LS45	石槍	142	44	34	176.27	頁岩
S14	S14	LL48	石槍	72	50	20	(51.65)	頁岩
S15	S15	LN46	石槍	52	63	21	(44.03)	頁岩
19-S16	S16	MB44	石匙	63	38	9	10.10	頁岩
S17	S17	LK49	石匙	68	23	9	11.00	頁岩
S18	S18	MB44	石匙	79	26	9	16.19	頁岩
S19	S19	LN46	石匙	74	31	8	13.33	頁岩
S20	S20	LR45	石匙	63	23	13	8.60	頁岩
S21	S21	LQ45	石匙	52	22	8	(8.01)	頁岩
S22	S22	LR45	石匙	65	32	11	17.51	頁岩
S23	S23	LJ48	石匙	71	39	13	25.25	頁岩
S24	S24	MC51	石匙	23	47	8.5	(9.42)	頁岩
S25	S25	MB55	石匙	29	52.5	8	8.55	頁岩
20-S26	S26	LK48	石匙	50	52	14	(14.35)	頁岩
S27	S27	LT49	石匙	47	46	11	17.06	頁岩
S28	S28	MB49	石匙	39	65	11	14.55	頁岩
S29	S29	LT43	石匙	24	24	9.5	(3.93)	頁岩
S30	S30	LM47	石匙	29	19	7.5	(3.08)	頁岩
S31	S31	LO48	石匙	67	38	11	(22.23)	頁岩
S32	S32	MA44	石匙	51	39	9.5	(13.02)	頁岩
S33	S33	MD51	トランシュル様石器	94	54	20	(85.53)	頁岩
21-S34	S34	LL45	石鎌	42	34	10	(12.06)	頁岩
S35	S35	JL45	石鎌	53	35	15	(28.64)	頁岩
S36	S36	LK48	石鎌	64	41	14.5	37.55	頁岩
S37	S37	LP45	石鎌	63	38	19	40.31	頁岩
S38	S38	LO45	石鎌	89	50	20.5	73.59	頁岩
S39	S39	LS43	石鎌	95	50	23	80.64	頁岩
S40	S40	LL48	石鎌	67	40	15	(40.68)	頁岩
S41	S41	MB44	石鎌	63	52	18	(66.05)	頁岩

( )内の数値は残存値である

第1表 石器計測一覧

神 番 号	國 版 番 号	出 土 地 区	器 種	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重 量 (g)	石 質
21-S42	10-S42	MD46	石 筒	56	51	17	(62.58)	頁 岩
S43	S43	L O 48	石 筒	73	50	20	(58.08)	頁 岩
S44	11-S44	L L 45	石 筒	87	57	25	(108.04)	頁 岩
S45	S45	M C 48	石 筒	88	42	16	72.03	砂質頁岩
22-S46	S46	L O 53	石 筒	74	41	15	39.69	頁 岩
S47	S47	M B 43	石 筒	64	42	17	40.81	頁 岩
S48	S48	L R 45	石 筒	70	51	14	(46.56)	頁 岩
S49	S49	L Q 51	石 筒	90	48	28	104.58	頁 岩
S50	S50	L N 48	石 筒	88	52	20	(89.24)	頁 岩
S51	S51	M E 49	石 筒	122	49	20	112.33	頁 岩
S52	S52	MD49	石 筒	129	56	29	185.55	頁 岩
S53	S53	L N 46	石 筒	63	44	15	(38.96)	頁 岩
S54	S54	M B 57	スクレイバ--	52	39	8.5	15.01	頁 岩
S55	S55	M B 45	スクレイバ--	102	63	31	146.58	頁 岩
23-S56	S56	MA57	スクレイバ--	43	19	7	5.03	頁 岩
S57	S57	L O 45	スクレイバ--	37	27	7	(4.81)	頁 岩
S58	S58	M C 52	スクレイバ--	67	25	8	9.54	頁 岩
S59	S59	L P 47	スクレイバ--	64	46.5	7	(19.06)	頁 岩
S60	S60	MA51	スクレイバ--	60	31	12	18.67	頁 岩
S61	S61	M C 46	スクレイバ--	71	39	15	33.48	頁 岩
S62	S62	M B 43	磨製石斧	44	33	24	(40.26)	安山岩
S63	S63	M A 47	磨製石斧	107	40	25	186.81	安山岩
24-S64	S64	L N 45	打製石斧	128	79	36	245.43	頁 岩
S65	S65	L N 45	打製石斧	142	78	42	234.17	頁 岩
S66	S66	L R 45	打製石斧	113	76	36	229.85	頁 岩
25-S67	S67	L T 52	石 刃	82	28	14	(41.93)	黏板岩
S68	S68	L N 45	石 棍	82	38	31	(117.63)	黏板岩
S69	12-S69	M C 53	半圓状扁平打製石器	81	193	43	754.81	安山岩
S70	S70	L T 44	擦 石	82	189	57	1060.63	安山岩
26-S71	S71	M C 53	凹 石	97	80	53	555.68	安山岩
S72	S72	M C 53	凹 石	93	79	48	445.21	安山岩
S73	S73	M A 51	凹 石	91	69	35	313.09	安山岩
S74	S74	MD52	凹 石	101	83	51	543.22	安山岩
S75	S75	L R 52	凹 石	133	93	80	1492.10	安山岩
S76	S76	L M 46	凹 石	133	101	103	2116.83	安山岩
S77	S77	MD52	磨 石	105	92	59	718.54	安山岩
S78	S78	M C 53	磨 石	250	72	53	1422.56	安山岩
27-S79	S79	M E 50	磨 石	116	76	34	494.45	安山岩
S80	S80	M C 54	磨 石	248	41	45	536.95	安山岩

( )内の数値は残存値である

第2表 石器計測一覧

## 第5章 まとめ

虫内Ⅱ遺跡は、南側が小さな沢、北西側が急な斜面、北側が湿地で囲まれておらず、その範囲は南西-北東約90m、南東-北西約70mと考えられる。今回の調査区は、工事区域が遺跡中央部を横断しており、遺跡の中央部に当たる。

調査において検出された遺構の大半は上坑で、その性格を把握したいものが多いが、中には陥れ穴と考えられる土坑1基(SK01)と、土壙墓と考えられる上坑1基(SK04)がある。検出遺構には、その覆土中から遺物が出土しなかったため、時代を特定したい遺構もあるが、遺構外から出土した土器の大部分が縄文時代後期～晩期であるため、その多くは当該期に位置付けられるものと思われる。

出土した遺物は、縄文時代の土器、石器、フレークなどが、遺構内外合わせてコンテナ(規格54cm×34cm×9.5cm)で10箱分である。このうち縄文時代の土器には、縄文時代前期・中期・後期・晩期の上器があるが、その主なものは、縄文時代後期～晩期の上器である。

以上のことから虫内Ⅱ遺跡は、縄文時代前期～晩期にかけての遺跡であり、その性格は狩猟場や墓域として利用された場所であったと推察される。

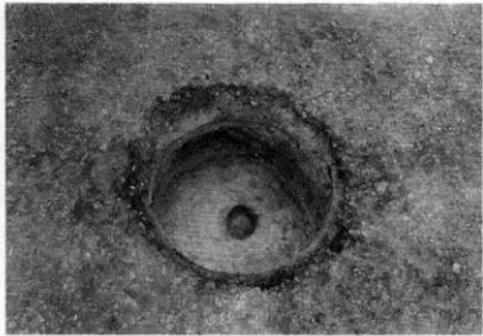
また、本遺跡の南東側の小さな沢を隔てて隣接する虫内Ⅰ遺跡においては、縄文時代後期～晩期にかけての大規模な墓域が形成されている。当遺跡でも同時期の墓壙や土器埋設遺構などが、検出されていることから、虫内Ⅰ遺跡の墓域を構成する一部に含まれるものと考えられる。



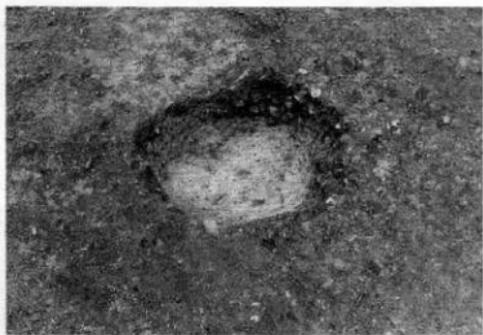
1. 調査前全景（北▷南）



2. 調査後全景（西▷東）



1. SK01土坑（南▷北）



2. SK03土坑（南東▷北西）



3. SK04土坑上面磚檢出狀況（西▷東）



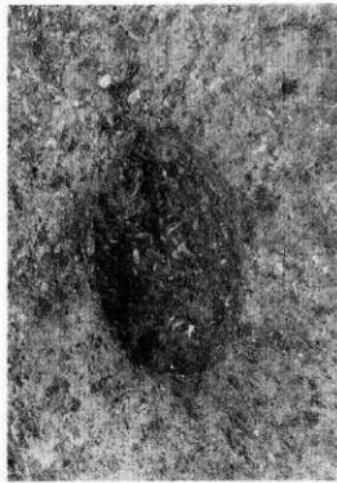
1. SK04土坑（南>北）



2. SK05土坑（西>東）



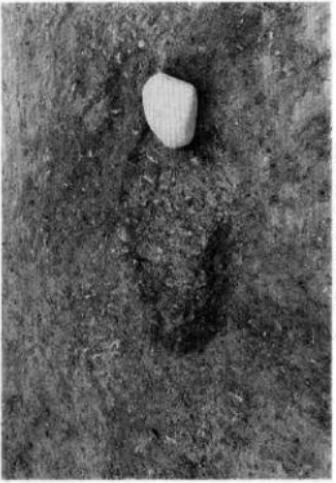
3. SK06土坑（南西>北東）



1. SK09土壤 (西△東)



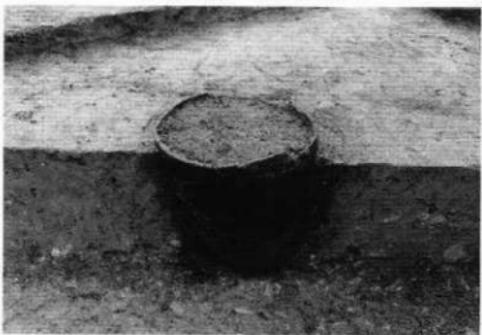
2. SK10土壤 (北△南)



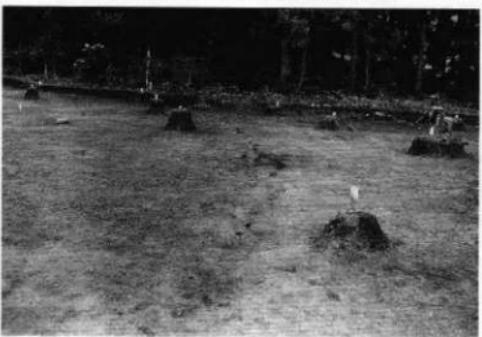
3. SK11土壤 (南△北)



1. S R02土器埋設遺構（東▷西）



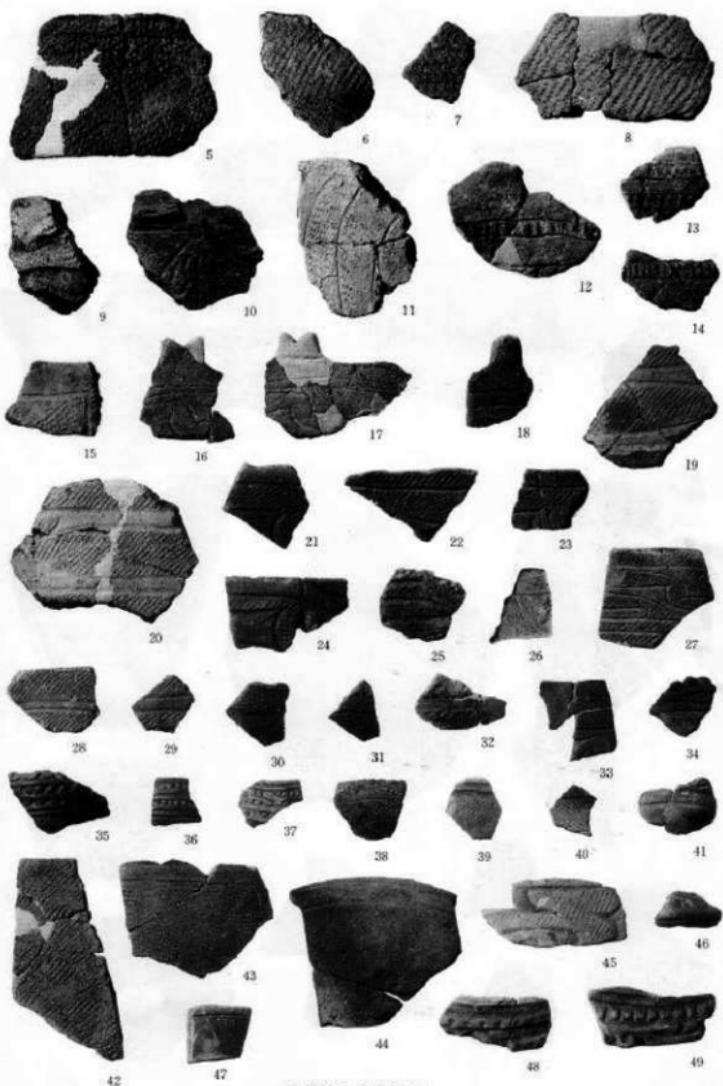
2. S R12土器埋設遺構（南東▷北西）



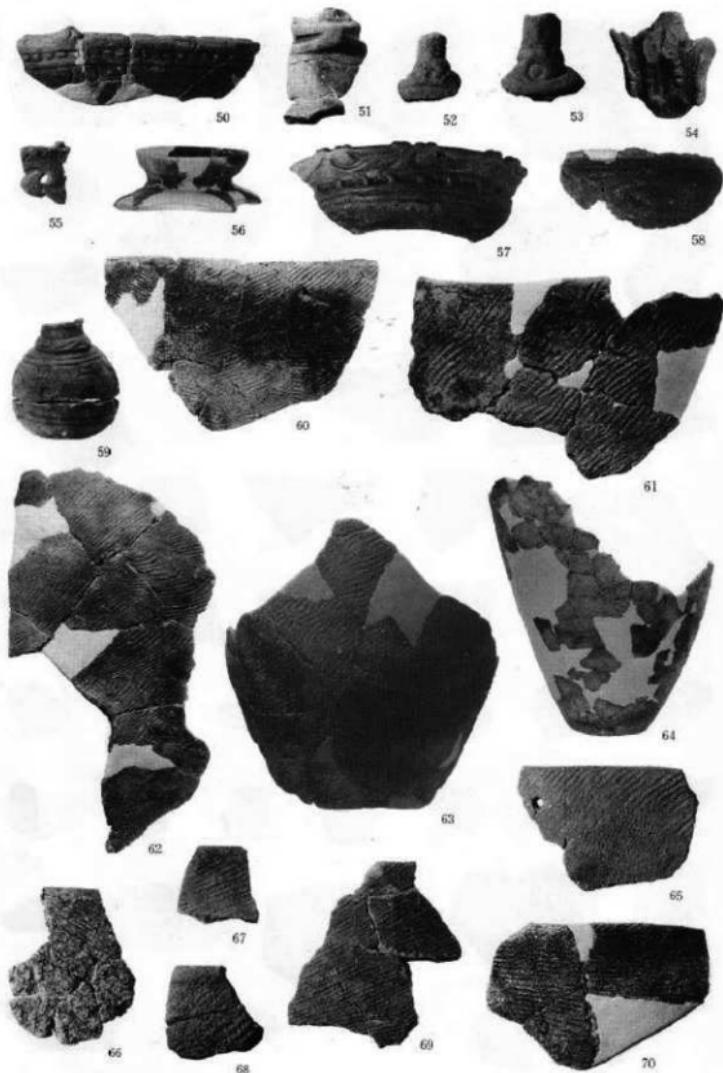
3. S D08溝状遺構（南▷北）



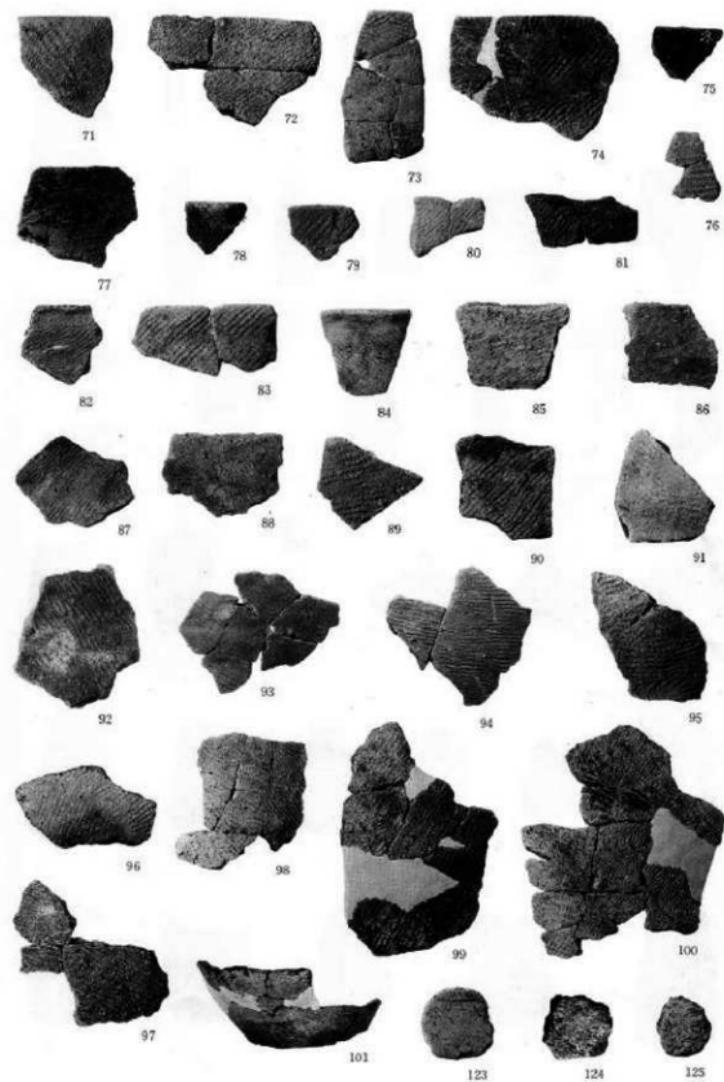
造構内出土遺物



遺構外出土遺物 (1)

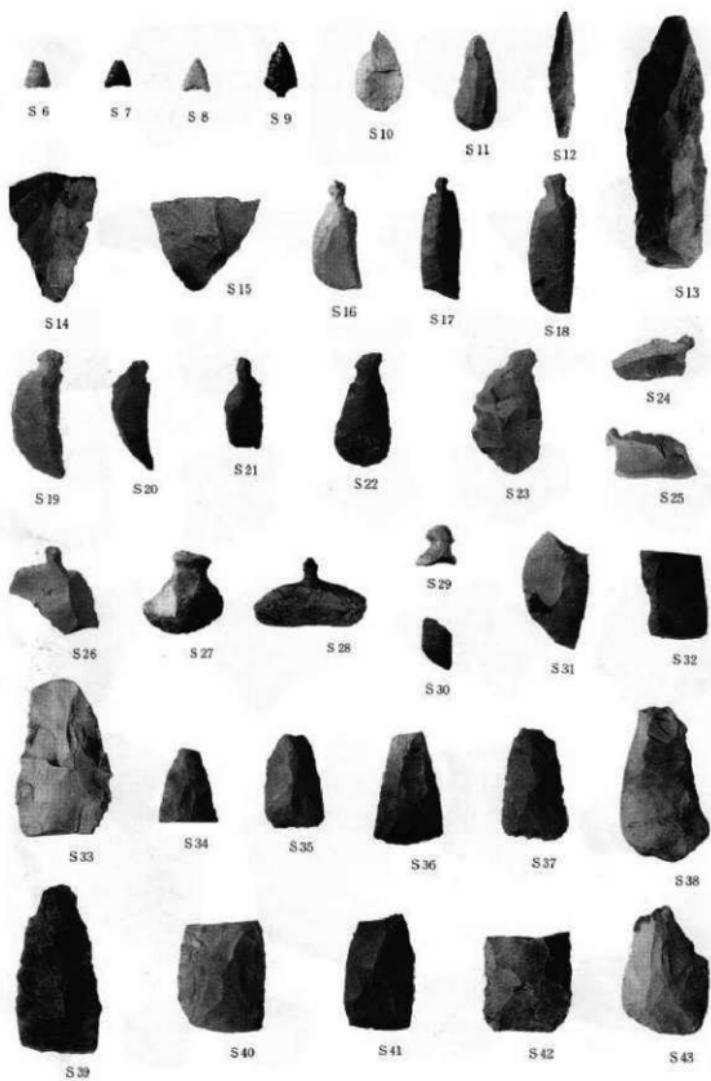


遺構外出土遺物 (2)

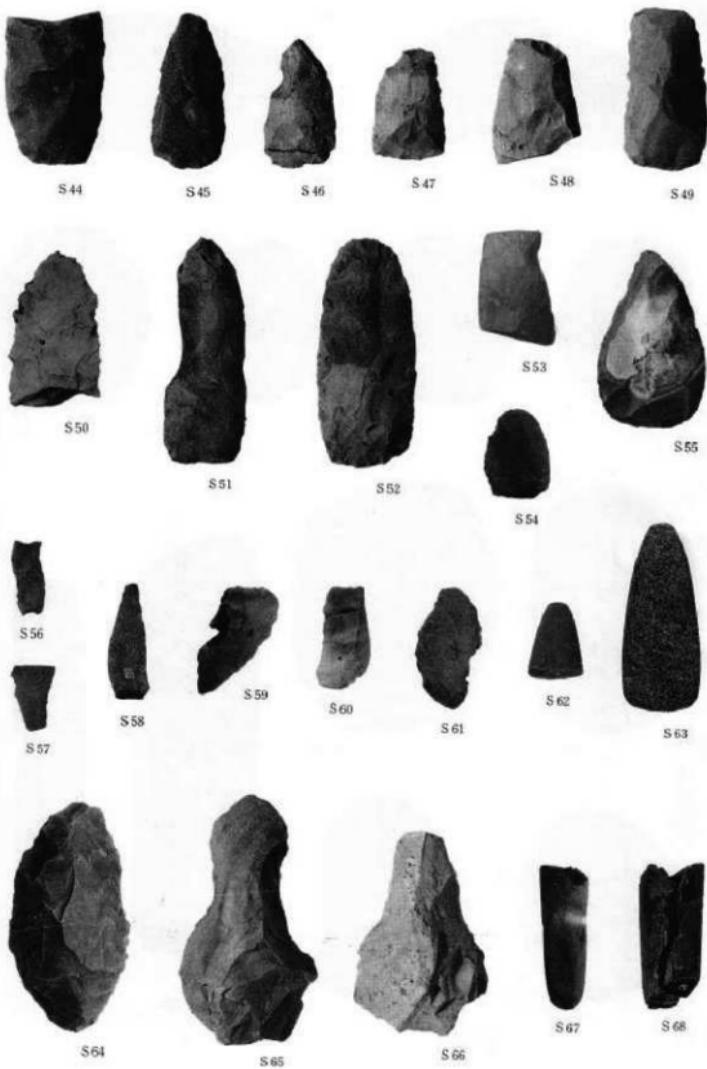


遺構外出土遺物 (3)

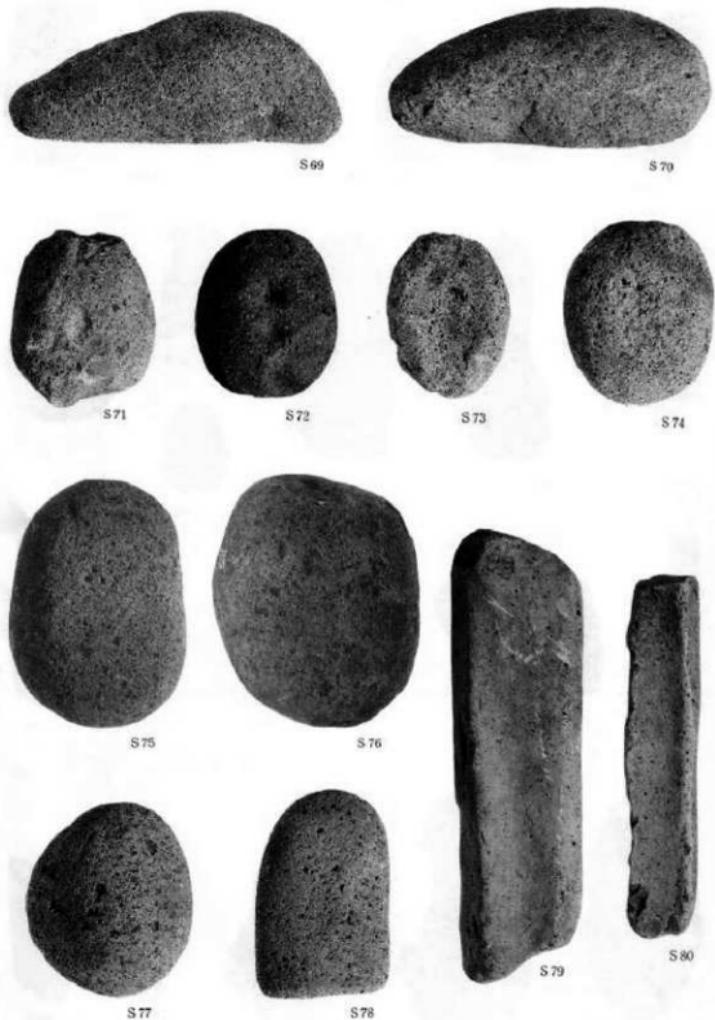
図版 10



造橋外出土遺物 (4)



造構外出土遺物 (5)



造構外出土遺物 (6)